

特40

162

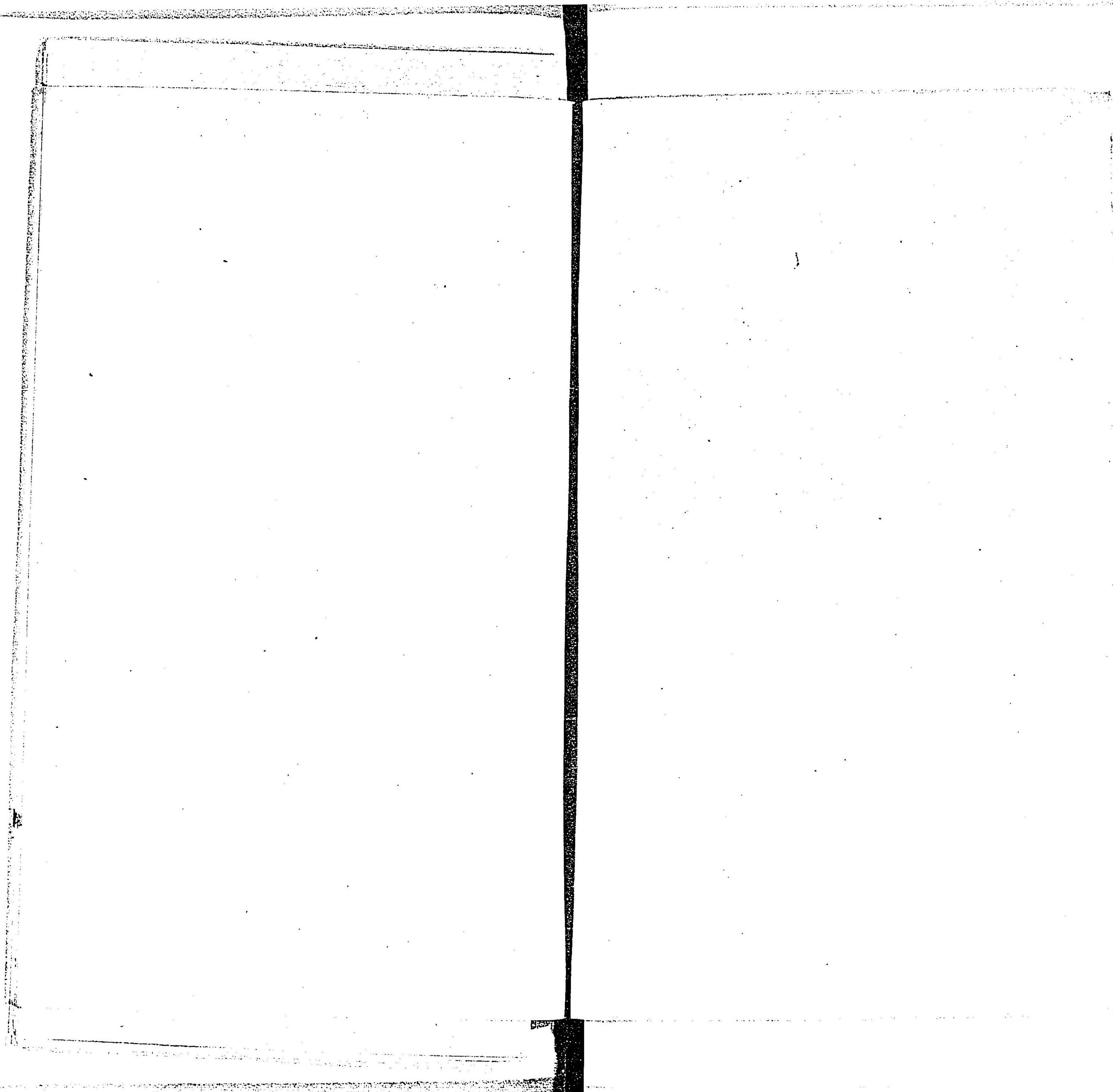
後拾遺和歌集

下

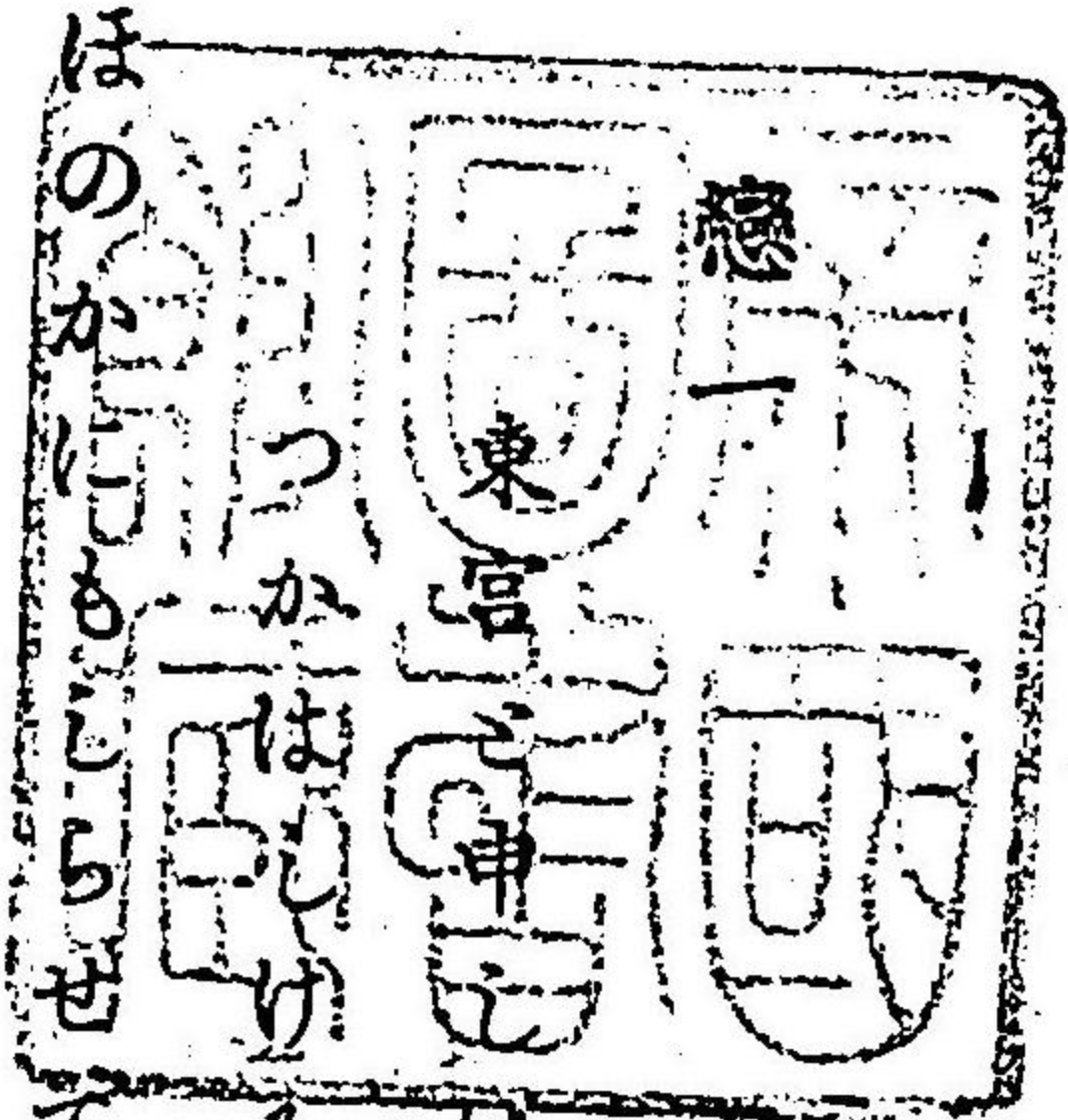


255

289



後拾遺和歌集第十一



けるとき故内侍のかみのもごにはしめて

後朱雀院御製

ほのかにもしらせてしかな春かすみかすみのうちに思ふころを
はしめたる人につかはしける

叡覺法師

木の葉散る山のした水うつもれてなかれもやらぬものをこそ思へ

題しらす

馬内侍

いかなれはしらぬにたふるうきぬなはくるしや心ひこしれすのみ
女をかたらはんごてめのこのもごにつかはしける



源頼光朝臣

かくなんごあまのいさり火ほのめかせ磯への浪のをりもよからは

かへし

源頼家朝臣母

たきつなみうちいてんことそつとましき思ひよるへき汀ならねは

ある人のいはくこの歌中納言惟仲にたかれて侍りけるを

りかくいへりければめのこにかはりてよめる

はしめたる女につかはしける

平經章朝臣

しもかれの冬野にたてるむらすくさほのめかさはや思ふこころを

大江嘉言

しのひつとやみなんよりは思ふことありけるごたに人に知らせん

男のはしめて人のもごにつかはしけるにかはりてよめる

和泉式部

たほめくなたれごもなくてよひくに夢に見えけんわれそその人
女にはしめてつかはしける

藤原實方朝臣

かくごたにえやはいふきのさしも草さしも知らしなもゆる思ひを
はしめたる戀をよめる

實源法師

なき名立つ人たに世にはあるものを君こふる身ごしられぬそうき
月あかき夜なかめしける女に年へてのちつかはしける

源則成

ごしもへぬなか月の夜のつき影のありあけかたのそらをこひつと
心かけたる人につかはしける

藤原長能

くみてしる人もあらなんなつやまの木のした水はくさかくれつと
はらから侍りける女のもごにたごを思ひかけて嫁
なる女のもごにつかはしける

よみ人しらす

小舟さしわたのはらからしるへせよいつれかあまの玉藻かるうら

題しらす

藤原通頼

獨してなかむる宿のつまにたふるしのふきたにも知らせてしかな

道命法師

思ひあまりいひ出るほごにかすならぬ身をさへ人に知られぬる哉

八月はかり女のもごに薄の穂にさしてつかはしける

祭主輔親

このすゝき忍ひもあへぬころにて今日はほに出る秋こしらなむ

題しらす

藤原兼房朝臣

いはぬまはまたしらしかしかきりなくわか思ふへき人はわれごも

女をひかへて侍りけるになさけなくていりにければ

つこめてつかはしける

源兼澄

わきも子か袖ふりかけしうつり香の今朝は身にしむ物をこそ思へ

五節に出てかいつくろひなごし侍りける女につかは

しける

中納言公成

雲の上にはかりさこゝ日かけにも君かつらゝはごけすなりにき

はしめて女のもごに春たつ日つかはしける

藤原能通朝臣

こしへつる山した水のうすこほり今日はるかせにうちもごけなむ

題しらす

能因法師

こほりごも人のこゝろをたもはゝやけふ立つ春のかせにこくやご

ふみつかはしける女の返事せさりければよめる

祭主輔親

みつしほのひるまたになき浦なれやかよふ千鳥のあごも見えぬは

かへり事せぬ女のこころにはやるこきとて

道命法師

しほたるゝわか身の方はつれなくてこころ浦にこそけふりたつなれ
返事せぬ人に山寺にまかりてつかはしける

思ひわひきのふ山へに入りしかさふみ見ぬみちはゆかれさりけり

女の家ちかき所にわたりて七月七日につかはしける

前大納言公任

雲井にてちきりし中はたなはたをうらやむはかりなりにけるかな
七夕後朝にをんなのもこにつかはしける

藤原隆賢

あふ事のいつこなきにはたなはたの別るゝさへそうらやまれける
人の氷をつゝみて身にしみてなごいひて侍りければ

逢ふ事のごとこほるまはいかはかり身にさへしみて歎くこかこる
題しらす

馬内侍

藤原顯季朝臣

鴨のふすかり田にたてる箱くきのいなごは人のいはすもあらなん
うへのをのこころも所の名をさくりて歌たてまつり侍
りけるに逢坂の關の戀をよませたまへる

御製

あふさかの名をもたのまし戀すればせきの清水にそてもぬれけり
題しらす

道命法師

あふ事はさもこそ人めかたからめこころはかりはこけて見えなん
返し

よみ人しらす

思ふらんしるしたになき下ひもにこころはかりのなにかこくへき

和泉式部

下きゆるゆきまの草のめつらしくわかたもふひこに逢見てしかな
入道一品宮に侍りけるみちのくにかもごにつかはし
ける

源頼綱朝臣

たくやまのまきの葉しろく降る雪のいつこくへしと見えぬ君かな
うれしきこいふわらはにふみかよはし侍りけるにこ
ご人にもものいはれてほごなく忘れにけりごきとて
つかはしける

源政成朝臣

うれしきをわするゝ人もあるものをつらきをこふる我やなになる
題しらす

平兼盛

戀そめしころをのみそ恨みつるひこのつらさをわれになしつゝ
文かよはすをんなことかたさまになりぬごきとてつ

かはしける

藤原為時

いかにせんかけても今はたのましと思ふにいごぬるゝたもごを
公資朝臣にあひくして侍りけるに中納言定頼忍ひて
たごつれけるをひまなきさまにや見えけんたえまか
ちにたごなひ侍りければ

相模

あふ事のなきよりかねてつらければさてあらましにぬるゝ袖かな
春よりもいひける女の秋になりて露はかりものい
はんごいひて侍りければ八月はかりにつかはしける

大中臣能宣朝臣

までごいひし秋もなかはになりぬるをたのめかたきし露はいかにそ
宇治前太政大臣家の三十講の後の歌合に

堀川右大臣

あふまでこせめていのちのをしければ戀こそ人のいのちなりけれ
やむこなき人をたもひかけたる男にかはりて

相模

つきもせずこひに涙をな^わかなこやな^くくりのいて湯なるらん

女のもごにつかはしける 藤原道信朝臣

あふみにかありこいふなる^{みくり生ふる}人くるしめのつくま江の沼

題しらす 永源法師

こひしてふ事を知らてややみなましつれなき人のなき世なりせば

赤染衛門

つれもなき人もあはれこいひてまし戀するほこを知らせたにせ^よは

女のふちに身をなけよこいひ侍りければ

源道濟

身をすてゝ深きふちにも入りぬへし底のこころの知らまほしさに
題しらす

大中臣能宣朝臣

こひく^てあふこも夢に見つる夜はいこゝ寢覺そわひしかりける

賀茂祭のかへさに前駈つかうまつれりけるに青色の

紐のたちて侍りけるを女の車より唐衣のひもをこき

てこちつけ侍りけるをたつねさせけれこ誰とも知ら

てやみにけり又の年の祭の垣下にて齋院にまゐりて

侍りけるに女のいつらつけしひもはこ木こつれて侍

りければつかはしける
からころもむすひこひもはさしなから袂はやくくちにしものを

かへし よみ人しらす

くちにける袖のこるこはした紐のこくるになごかしらせさりけん

題知らず

能因法師

にしき木はたてなからこそくちにけれけふの細布むねあはしこや

西宮前左大臣

須摩の蜚の浦こくふねのあこもなく見ぬ人こふるわれやなになる

女のもごにつかはしける

さりごもご思ふころにひかされて今まで世にもふるわか身かな

小野宮太政大臣女

たのむるにいのちののふる物ならば千年もかくてあらんごや思ふ

題知らず

小辨

思ひしるひごもごそれあれあちきなくつれなき戀に身をやかへてん

平兼盛

人しれすあふをまつまに戀死なは何にかへたるいのちごかいはん

長久二年弘徽殿女御家に歌合しけるによめる

永成源イ法師

こひ死なん命はここのかすならてつれなきひごのはてそゆかしき

俊綱朝臣の家に題を探りてうたよみ侍りてけるに戀

中原政義

つれなくてやみぬる人に今はたごひしぬごたにきかせてしかな

ふみにかごんによかるへき歌ごて俊綱朝臣人々によ

良暹法師

あさねかみ亂れて戀そごころなるあふよしもかなもごゆひにせん

藤原國房

からころもそてこの浦のうつせ貝むなしきごひにごこのへぬらむ

關白前左大臣家に人々經年戀といふ心をよみ侍りけ

るに

左大臣

こひ

われか身はさかへる鷹となりにけり年はふれとももごはわすれす

右大臣

ごしをへて葉かへぬ山のしひしはやつれなき人のこころなるらん

日ころけふごたのめたりける人のさもあるまごけに

みえ侍りければよめる

道命法師

うれしごも思ふへかりし今日しもそいごくなけきのそふ心地する

後拾遺和歌集第十二

戀二

女にあひて又の日つかはしける

祭主輔親

ほごもなくこふる心はなになれや知らてたにこそごしはへにしか

實範朝臣のむすめのもごにかよひそめてあしたにつ

かはしける

源頼綱朝臣

いにしへの人さへ今朝はつらきかなあくれはなごか歸りそめけん

惟任朝臣にかはりてよめる

永源法師

夜をこめてかへる空こそなかりけれつうらやましきはありあけの月

平行親朝臣のむすめのもごにまかりそめて又のあし
たによめる 藤原隆方朝臣

くるゝまは千とせをすこす心地してまつまははまここに又しかりけり
題しらす 源定季

今日よりはごくくれ竹のふしここに夜はなかかれごたもほゆる哉
女のもごより歸りてつかはしける 少將藤原義孝
君かためをしからさりしいのちさへなかくもかなご思ひけるかな
人のもごにかよふ人にかはりてよめる

伊勢大輔

今日くるゝ程待つたにも又しきにいかてこゝろをかけてすきけん
女のもごより雪ふり侍りける日歸りてつかはしける

藤原道信朝臣

かへるさのみちやはかはる變らねごくるにまごふ今朝のあわ雪
明けぬれはくるゝ物ごは知りながら猶うらめしきあさほらけかな
ある人のもごにごまりて侍りけるにひるはさらに見
くるごごていて侍らさりければよめる

ちかの浦に浪よせかへる心地してひるまなくともくらしつるかな
題しらす 永源法師

あひ見ての後こそこひはまさりけれつれなき人をいまはうらみし
女につかはしける 西宮前左大臣

うつゝにて夢はかりなるあふごごをうつゝはかりの夢になさはや
題しらす 藤原道信朝臣

たまさかにゆきあふ坂の關もりは夜をこほさぬそわひしかりける
清原元輔

知る人もなくてやみぬるあふ事をいかてなみたのそてにもるらん

男のまでこいひたこせて侍りける返事によみ侍りけ

る

相模

頼むるを頼むへきにはあらねとも待つこはなくて待たれもやせん

こきくものいふ男くれゆくはかりこいひて侍りけ

れはよめる

なかめつゝ事ありかほに暮してもかならず夢に見えはこそあらめ

なかの關白少將に侍りける時はらからなる人にももの

いひわたり侍りけりたのめて來さりけるつこめて女

にかはりてよめる

赤染衛門

やすらはてねなましものを小夜更けてかたふく迄の月を見しかな

人のたのめて來す侍りければつこめてつかはしける

和泉式部

たきなからあかしつるかなごもねせぬ鴨のうは毛の霜ならなくに

越前守景理夕さり來むこいひてたこせさりければよ

める

大輔命婦

ゆふつゆをあさ芽かうへご見しものを袖にたきてもあかしつる哉

女のもごにつかはしける

藤原隆經朝臣

いかにせんあなあやにくの春の日や夜はの景色のかくらましかは

返し

童木

うは玉の夜はのけしきはさもあらはあれひとの心を春日ごもかな

題しらす

源重之

よご野へごみま草刈りに行く人もくれにはたごにかへるものかは

女のもごにまかりけるにかくれて逢はさりければか

源師賢朝臣

へりてつかはしける

かへりしはわか身ひこつこたもひしを涙さへこそこまらさりけれ

左大将朝光女のもごにまかれりけるになやましかへ

りねごいひ侍りければかへりてのあした女のもごよ

りつかはしける
よみ人しらす

あま雲のかへるはかりのむら雨にこころせきまてぬれしそてかな

ものいひ侍りける男のひるはかよひつゝ夜ごまらさ

りければよめる
一宮紀伊

わか戀はあまのはらなる月なれやくるれはいつるかけをのみ見る

大貳高遠ものいひ侍りける女の家のかたはらに又忍

ひてもものいふ女の家侍りけりかこの前より忍ひてわ

たり侍りけるをいかてかきくけん女のもごよりつか

はしける

よみ人しらす

すきて行く月をもなにかうらむへき待つ我身こそあはれなりけれ

返し

大貳高遠

杉たてる門ならませはごひてまじこころのまつはいかゞしるへき

題知らす

和泉式部

津のくにのこやごも人をいふへきにひまこそなけれ芦の八重ふき

兼仲朝臣のすみ侍りけるごき忍ひたる人かすくゝに

あふ事かたく侍りければよめる
高階章行朝臣女

ひごめのみしけきみ山の青つゝらくるしき世をそたもひわひぬる

題しらす

よみ人しらす

こぬもうくくるもくるしき青つゝらいかなる方すちににたもひたえなん

人のむすめの親にもしられてものいふ人侍りけるを

たやきとつけていひ侍りければ男まうてきたりけれ
ごかへりにけりさきとて女にかはりてつかはしける

よみ人しらす

しるらめや身こそ人めをはかりの關になみたはごまらさりけり

忍ひてものたもひ侍りけるころ色にやしるかりけん

うちこけたる人なごか物むつかしけにこいひ侍りけ

れは心のうちになんたもひける 相模

もろごもいつかこくへき逢ふごこのかたむすひなるよはの下紐

ものいひわたる男のふちはせになごいへりける返事

によめる 赤染衛門

淵やさは瀬にはなりけるあすか川あさきをふかくなす世なりせは

道濟かる中へまかりくたりけるに女のごよりつか

はしける

よみ人しらす

あひみてはありぬへしやごころみる程は苦しき物にそありける

ごころならぬ事や侍りけんかたらひける女のごに

まかりて枕にかきつけ侍りける 右大臣

わかごころ心にもあらでつらからは夜かれんごこの形見ごもせよ^{見イ}

男の來むごいひはへりけるを待ちわつらひてゆふけ

をこはせけるによにこしごつけ侍りければ心ほそく

思ひてよみ侍りける よみ人しらす

來ぬまでも待たまし物をなか／＼にたのむ方なきこのゆふけかな

入道攝政九月はかりの事にやよかれして侍りけるつ

ごめてふみたこせて侍りける返事につかはしける

大納言道綱母

きえかへり露もまたひぬ袖のうへに今朝はしくるゝ空もわりなし

中關白女のもごより曉にかへりてうちにもいらてご
にるなから歸り侍りければよめる 馬内侍

あかつきの露はまくらにたきけるを草葉のうへごなにもひけん
あすのほごにまた來むごいひたる男に

相模

昨日けふなけくはかりのことちせはあすに我身やあはごすらん
雨のいたうふる日涙の雨の袖になごいひたる人に

和泉式部

見し人にわすられてふる袖にこそ身をさるあめはいつもをやまね

輔親ものいひ侍りける女のもごによへは雨の降りし
かははごかりてなごいへりける返事にこくやみにし

ものをこて女のつかはしける よみ人しらす

わすらるゝ身をさる雨はふらねごも袖はかりこそかはかさりけれ

忍ひてかよふ女のまたごご人にもものいふごきごてつ
かはしける

藤原能通朝臣

こえにける涙をはしらてすゑの松千代までごのみたのみけるかな
かたらひ侍りける女のごご人にもものいふごきごてつ

藤原實方朝臣

うら風になひきにけりなさごのあまのたくものけふり心よわさは

清少納言人にしらせてたえぬ中にて侍りけるに久し

うたごつれ侍らさりければよそくにてものなごい
ひ侍りけり女さごよりてわすれにけりなごいひ侍り

ければよめる

忘れすよ又かはらすれすよかはらやのしたくけふりしたむせひつゝ

男かれくになり侍りける比よめる

よみ人しらす

風の音の身にしむはかり聞ゆるはわか身にあきやちかくなるらん

かれくなる男のたほつかなくなこいひたりけるに

大貳三位

よめる

ありま山猪名のさく原かせ吹けはいてそよひをわすれやはする

右大將道綱又しうたごせてなこうらみぬそこいひ侍

赤染衛門

りければむすめにかはりて

うらむこも今はみえしと思ふこそせめてつらさのあまりなりけれ

夜ここに来んこいひて夜かれし侍りける男のもこに

和泉式部

つかはしける

こよひさへあらはかくこそたもほえめ今日暮れぬまの命もかな

男うらむる事やありけんけふをかきりにてまたはさ

らにれさせこいひて出て侍りにけれこいかに思ひ

けんひるつかたれこつれて侍りけるによめる

赤染衛門

あすならはわすらるゝ身こゝになりぬへし今日をすくさぬ命もかな

題しらす

藤原長能

厭ふとは知らぬにあらすしりなから心にもあらぬこゝろなりけり

七月七日二條院の御方にたてまつらせたまひける

後冷泉院御製

逢ふことはたなはたつめにかしつれこ渡らまほしきかさくきの橋

後拾遺和歌集第十三

戀三

陽明門院皇后宮に申しける時又しく内にまゐらせたまはさりければ五月五日うちよりたてまつらせ給ひける
後朱雀院御製

あやめ草かけしたもこのねを絶えて更にこひちにまよふころかな
ふくに侍りけるころ忍ひたる人につかはしける

清原元輔

藤ころもはつる袖のいよわみたえてあひみぬほこそわりなき
高階成順棟石山にこもりて又しうたごし侍らさりけれ

はよめる

伊勢大輔

みるめこそあふみの海にかたからめ吹きたにかよへ志賀のうら風

あひそめて又も逢ひ侍らさりける女に遣はしける

叡覺法師

あき風になひきなからも葛の葉のうらめしくのみなごかみゆらん

津の國にあからさまにまかりて京なる女につかはし

大江匡衡朝臣

ける

こひしきになにはのこごもたもほえすたれ住吉のまつこいひけん

源遠古か娘にもものいひわたり侍りけるにかれかもこ

にありける女を又つかへ人あひすみ侍りけり伊勢國

にくたりて都こひしうたほえけるにつかへ人もたな

し心にや思ふらんこたしはかりてよめる

祭主輔親

わか思ふ都のはなのごふさゆる君もこつえのこつこころあらし

橋則光朝臣陸奥守にて侍りけるにたくのこほりにま

かりいるこて春なむかへるへきこいひたこせてはへ

りければ女のよめる

光朝法師母

かたしきの衣のすそはこほりつゝいかてすくさむこくるはるまで

ごほき所なる女につかはしける

藤原國房

こひしきは思ひやるたになくさむをこころに劣る身こそつらけれ

人のかたらふ女を忍ひてもものいひ侍りけるにももの

まかりてかへりける路にこの女を男あなかへあてく

たり侍りけりあふ坂の關にゆきあひてせんかたなく

思ひ詫ひて人をかへしていひつかはしける

大中臣能宣朝臣

いつ方をわれなかもめましたまさかにゆきあふ坂のせきなかりせは

返し

よみ人しらす

ゆきかへり後にあふごもこの度はこれよりこゆるもの思ひそなき

民部卿經信

あつまに侍りける人に遣はしける

あつま路の旅のそらをそたもひやるそなたにいつる月をなかも

康資王母

かへし

思ひやれしらぬくもちもいりかたのつきより外のなかもやはある

左近中將隆綱

たなし人につかはしける

かへるへきはごをかそへてまつ人はすくる月日そうれしかりける

康資王母

返し

あつまやのかやか下ふしみたるれはいさや月日のゆくもしられす

題しらす

藤原惟規

しもかれのかやか下をれごにかくに思ひみたれてすくすころかな

ものへまかりけるになるみのわたりごいふごころに

て人をたもひ出てよみ侍りける 増基法師

かひなきは猶ひごしれすあふ事のはるかなるみのうらみなりけり

ごほき所に侍りける女につかはしける

右大辨通俊

思ひやるころの空にゆきかへりたほつかなさをかたらましかは

清家かちよの^{ごもい}もごにあはの國にくたりて侍りける時

かの國の女に物いひわたり侍りけり父津國になりう

つりてまかりのほりければ女たよりにつけてつかは

しける

よみ人しらす

心をはいくたのもりにかくれともこひしきにこそしぬへかりけれ
たのめたるわらはのひさしう見え侍らさりけれはよみ侍り
ける
律師慶意

頼めしを待つに日敷の過ぎぬれはたまのをよわみたえぬへきかな
源頼綱朝臣父のこもに美濃國に下り侍りける時かの
國の女に逢ひて又たこもし侍らさりけれは女のよめ
よみ人しらす

あさましや見しは夢かここふ程にたころかすにもなりぬへきかな
中納言定頼か許につかはしける
大和宣旨

はるくこ野中に見ゆるわすれ水たえまたえまをなけくころかな
題しらす
大納言忠家

いかはかりうれしからまし面影に見ゆるはかりのあふ夜なりせは

男ありける女を悉ひてものいふ人侍りけりひまなき
さまをみてかれくになりはへりけれは女のいひつ
かはしける
よみ人しらす

わかやこの軒のしのふにこよせてやかてもしけるわすれ草かな
成資朝臣大和守にて侍りける時ものいひわたり侍り
けりたえてこしへにけるのち宮にまゐりてはへりけ
る車に入れさせて侍りける
皇太后宮陸奥

あふこを今はかきりこみわのやま松のすきにしかたそこひしき
五せちに出で侍りける人をかならずたつねんこいふ
男侍りけれこたこせさりけれは女にかはりてつかは
しける
よみ人しらす

杉むらこいひてしるしもなかりけり人もたつねぬみわのやまもこ

題しらす

相模

すみよしの岸ならねとも入しれぬころのうちのまつそわひしき

思ひけるわらはの三井寺にまかりて又しうたごもし

侍らさりければよみ侍りける 僧都遍教

あふさかの關のしみつやにこるらんいりにし人のかけも見えぬは

題しらす

左京大夫道雅

なみたやは又もあふへきつまならんなくより外のなくさめそなき

かたらひ侍りけるわらはのこご人に思ひつきければ

又しうたごもせて侍りけるにさすかにおほえければ

よみてつかはしける

前律師慶暹

よそ人になりはてぬこや思ふらんうらむるからにわすれやはする

わすれしごちきりたる女の又しうあひ侍らさりけれ

はつかはしける

大中臣輔弘

つらしごも思ひしらてそやみなまし我もはてなきころなりせば

又しうごはぬ人のたごつれてまたたごもせずなり

侍りにければいひつかはしける 和泉式部

なか／＼にうかりしまゝにやみにせは忘るゝ程になりもしなまし

題しらす

うき世をも又たれにかはなくさめん思ひしらすもごはぬきみかな

ものいひわたり侍りける女たやなごにつゝむ事あり

て心にもかなはさりければよめる 源政成

あふまでやかきりなるらんご思ひを纏はつきせぬ物にそ有ける

伊せの齋宮わたりよりまかりのほりて侍りける人に

忍ひてかよひける事をたほやけもきこしめしてまも

りめなごつけさせ給ひてしのひにも通はずなりにけ

れはよみ侍りける

左京大夫道雅

あふ坂は東路ここそきくしかこころつくしのせきにそありける
さかき葉やゆふしてかけしそのかみにたしかへしても渡るころ哉
今はたゞたもひたえなんこはかりを人つてならていふよしもかな
又たなし所にむすひつけさせ侍りける

みちのくのをたえのはしやこれならんふみとふますみ心まこはす

心さり侍りける女のこさまになりてのち石山に籠

りあひて侍りければよみ侍りける 前大納言經輔

こひしさもわすれやはするなか／＼にこころさわかす志賀の浦浪

中納言定頼今はさらにこしなごいひてかへりてたご

もし侍らさりければつかはしける 相模

來しごたにいはて絶なはうかりける人のまことをいかてしらまし

題しらす

たかそてに君かさぬらんからころも夜なく我にかたしかせつと

和泉式部

くろ髪のみたれてしらすうちふせはまつかきやりしひこそ戀しき

ある女に

清原元輔

うつり香のうすくなり行くたき物のくゆる思ひにきえぬへきかな

男にわすられてさうそくなごつとみてたくり侍りけ

るにかはのたひにむすひつけ侍りける

和泉式部

なきなかなみたに堪へて絶えぬればはなたの帯の心地こそすれ

題しらす

相模

中たゆるかつらき山の岩はしはふみみることもかたくそありける

二條院に侍りける人の許につかはしける

大貳良基

忘れなんと思ふさへこそ思ふことかなはぬ身にはかなはさりけれ

題しらす

高橋良成

忘れなんともふにぬるゝたもことかな心なかきはなみたなりけり

大納言忠家母

いかはかりたほつかなさを嘆かましこの世のつねと思ひなさすは

權僧正静圓

あふことのとくひたふるの夢ならはたなしまくらに又もねなまし

心地れいならず侍りける頃人のもことにつかはしける

和泉式部

あらさむこの世のほかのたもひてに今一たひのあふこともかな

父のもことこのくにと侍りけるときたもくわつら

ひて京に侍りける齋院の中將かもことにつかはしける

藤原惟規

みやこにも戀しきこと人イのたほかれは猶このたひはいかんこそ思ふ

ころろかはりたる人のもことにつかはしける

周防内侍

契りしにあらぬつらさもあふことこのなきにはえこそ恨みさりけれ

題しらす

西宮前左大臣

忘れなんそれもうらみす思ふらんこふらんごたにたもひたこせよ

七月七日女のもことつかはしける 藤原道信朝臣

年の内にあはぬためしの名をたてゝわれたなはたにいまるへき哉

増基法師

たなはたをもごかしこのみわか見しもはてはあひ見ぬ例こそなる

たいしらす

馬内侍

くもてさへかきたえにけるさゝかにの命をいまはなにくかけまこ

後拾遺和歌集第十四

戀四

こころかはり侍りける女に人にかはりて

清原元輔

ちきりきなかたみに袖をしほりつゝするの松やまなみこさしこは

中納言定頼かもこにつかはしける 公圓法師母

あしの根のうき身のほこゝ知りぬれはうらみぬ袖も波はたちけり

ごところあはぬ人にあひて後につかはしける

道命法師

あひ見しをうれしき事さたもひしはかへりて後のなけきなりけり

題しらす

藤原元真

み山木のこりやしぬらんと思ふまにいこゝたもひのもえまさる哉

惠慶法師

いはしろの杜のいはしと思へともしづくにぬるゝ身をいかにせん

曾禰好忠

あちきなしわか身にまさる物やあると戀せし人をもときしものを

和泉式部

我こいかに^{てい}つれなくなりてこゝろみんつらき人こそ忘れかたけれ

忍ひてものたもひけるころによめる

相模

あやしくもあらはれぬへき袂かなしのひねにのみぬらすと思へは^{こい}

西宮前左大臣

うち忍ひなくとせしかと君こふるなみたはいろにいてにけるかな

承暦二年内裏歌合によめる

辨乳母

戀すともなみたの色のなかりせはしはしはひこに知られさらまし

題しらす

源道濟

人しれぬこひにしなはたほかたの世のはかなき^{さい}こ人やたもはん

忍ひたる女に

堀川右大臣

人しれすかほには袖をたほひつゝなくはかりをそなくさめにする

冬の夜の戀をよめる

藤原國房

たもひわひかへすころものたもこよりちるや涙のこほりなるらん

題しらす

清原元輔

なくさむる心はなくて夜もすからかへすころものうらそぬれける

よみ人しらす

世のなかにあらはそ人のつらからんと思ふにしもそ物はかなしき

道命法師

夜な夜なは目のみさめつゝたもひやる心や行きてたごろかすらん

平兼盛

思ふてふここはいはてもたもひけりつらきも今はつらしと思はし

男のたえて侍りけるにほこへてつかはしける

中原頼成妻

たもひやる方なきまゝにわすれ行く人のこゝろそうらやまれける

題しらす

能因法師

閨ちかき梅のほひにあさなあさなあやしくこひのまさる比かな

相模

あやふしと見ゆるとたえのまる橋のまるなごかゝる物たもふらん

和泉式部

世中にこひてふ色はなけれごもふかく身にしむものにそありける

あり所しらぬ女に

清原元輔

さゝかにのいつくに人は有りきたにこゝろ細くも知らてふるかな

堀河の右大臣のもごにつかはしける

大貳三位

こひしさのうきにまさると物ならはまた二たひときみを見まじや

題しらす

藤原有親

有れはこそひともつらけれあやしきは命もかなとたのむなりけり

露たきたる萩にさして女のもごにつかはしける

源道濟

庭のたもの萩のうへにてぬりぬらんものたもふひこの夜はの袂は

題しらす

相模

わか袖をあきのくさ葉にくらへはやいつれか露のたきはまさるこ
ありそうみの濱の真砂をみなもかなひこりぬる夜の數にこるへく

藤原長能

かそふれは空なる星もしるものをなにをつらさのかすにこらまし
二月はかりに人のもこにつかはしける

藤原道信朝臣

つれくと思へはななき春の日にたのむこころはなかくめをそする
五月五日に人のもこにつかはしける

和泉式部

ひたすらに軒のあやめのつくくこたもへはねのみかくる袖かな
題しらす

題しらす

たくひなくうき身なりけり思ひしる人たにあらはこひこそはせめ
君こふるころは千々に碎くれこひこつもうせぬ物にそありける
泪川たなし身よりはなかるれここひをはけたぬものにそありける

小辨

わか戀はます田の池のうきぬなはくるこくてのみこしをふるかな

源道濟

大かたにふるこそみえし五月雨は物たもふ袖の名にこそありけれ

西宮前左大臣

よそにふるひこは雨とやたもふらんわかめにちかき袖のしつくを
日にそへてうき事のみもまさる哉暮てはやかて明けすもあらなん

天徳四年内裏歌合によめる

藤原元真

君こふこかつは消えつく程ふるをかくてもいける身とや見るらん

題しらす

こひしさの忘れぬへき物ならはなにしかいける身をもうらみん

中納言定頼かもごにつかはしける 大和宣旨

戀しさを忍ひもあへすうつせみのうつしこころもなくなりにけり

小辨かもごにつかはしける 民部卿經信

君かためたつるなみたの玉ならはつらぬきかけて見せましものを

西宮前左大臣

契あらは思ふか とこそ ともはましあやしやなにのむくいなるらん

今日しなはあすまで物は思はしこともふにたにもかなはぬそうき

女につかはしける 入道攝政

たもひには露のいのちそ消えぬへきここのはにたにかけよかし君

相模

題しらす

やくこのみ枕のしたにしほたれてけふりたえせぬごこのうらかな

永承六年内裏歌合に

うらみわひほさぬ袖たにある物をこひにくちなん名こそをしけれ

題しらす

神なつき夜はの時雨にこよせてかたしくそてをほしそわつらふ

和泉式部

さま／＼にたもふ心はあるものをたしひたすらにぬる／＼そてかな

藤原長能

わか心かはらんものかかはらやのした／＼くけふりわきかへりつ／＼

かれ／＼になり侍りける男によめる

藤原範永朝臣女

打ちはへてくゆるも苦しいかて猶世にすみかまのけふりたえなん

題しらす

和泉式部

ひこの身も戀にはかへつなつ蟲のあらはにもゆこ見えぬはかりそ
かるもかき臥猪の床のいをやすみさこそねねられめいさらめかゝらすもかな

女のもこにつかはしける

入道攝政

わか戀ははるの山邊につけてしをもえてもきみか目にも見えなん

返し

大納言道綱母

春の野につくる思ひのあまたあれはいつれを君かもゆるさかみん

たなし女に

入道攝政

春日野は名のみなりけり我身こそこふ火ならねこもえわたりけれ

永承四年内裏歌合によめる

相模

いつこなくこゝろそらなるわか戀やふしの高根にかゝるしらくも

堀川右大臣

うしこてもさらに思ひそかへされぬ戀はうらなき物にそありける

つらかりける女に

平兼盛

難波かたみきはのあしのたいのよにうらみてそふる人のこゝろを

題しらす

源重之

まつしまやをしまの磯にあさりせしあまの袖こそかくはぬれしか

盛少將

かきりそこたもふにつきぬ涙かなたさふるそてもくちぬはかりに

雨の降り侍りける夜女に

藤原長能

かきくらし雲間も見えぬ五月雨はたえすものたもふ我身なりけり

題しらす

相模

なみたこそ近江の海となりけれ見るめなしてふなかめせしまに

露はかり違ひそめたる男の許につかはしける

和泉式部

しら露も夢もこの世もまほろこもたこへていはくひさこかりけり

後拾遺和歌集第十五

雜一

題しらす

喜滋為政朝臣

年ふれはあれのみまさる宿のうちにこころなかくもすめる月かな

宇治忠信女母イ

つき影のいるををしむもくるしきににしには山のなからましかは

藤原為時

われひとりなかむと思ひし山さごにたもふここなき月もすみけり

船中月といふ心をよみ侍りける

源師賢朝臣

みなれさをこらてそくたすたかせ舟月のひかりのさすにまかせて

池上月をよめる 良暹法師

つきかけのかたふくまゝに池水をにしへなかるごともひけるかな

後冷泉院御時きさいの宮にて月をよみ侍りける 大藏卿長房

月かけは山のはいつるよひよりもふけ行くそらそてりまさりける

連夜に月をみるこいふ心をよみ侍りける 源頼家朝臣

敷妙のまくらのちりやつもるらんつきのさかりはいこそねられね

月のいこたもしろう侍りける夜きし方行末もありか
たき事なご思うたまへてうちより輔親か六條の家に
まかれりけるに夜更けにければ人もあらしご思ひた
まへけるにすみあらしたる家のつまに出てゐて前な

る池に月のうつりて侍りけるをなかめてなん侍りけ
る同じ心にもなごいひてよみ侍りける

懐圓法師

池みつはあまのかはにやかよふらん空なるつきのそこに見ゆるは

中納言泰憲近江守に侍りける時三井寺にて歌合し侍

りけるに月をよみ侍りける 永胤法師

いつかたへ行くにとも月の見えぬかなたなひく雲のそらになければ

永承四年内裏歌合に月をよめる 江侍従

いつよりもくもりなき夜の月なれば見る人さへに入りかたきかな

麗景殿女御家歌合に 堀河右大臣

やまのはのかくらましかは池水に入れともつきはかくれさりけり
題こらす 加賀左衛門

やごごこにかはらぬものは山のはの月まつほごのこころなりけり

依月客來といふこころをよめる 永源法師

我ひとりなかめてのみやあかさましこよひの月のたほろなりせば

賀陽院にたはしましける時石立て龍落しなごして御
らんしける比九月十三夜になりにつければ

後冷泉院御製

岩間よりなかるゝ水ははやけれさうつれるつきのかけそのごけき

月の夜中納言定頼か許につかはしける

彈正尹清仁親王

板まあらみあれたる宿のさひしきはこころにもあらぬ月を見る哉

その夜かへしはなくて二三日はかりありて雨のふり
ける日みこのもごにつかはしける 中納言定頼

雨ふれはねやの板まもふきつらんもりくるつきはうれしかりしを

人のもごよりこよひの月はいかゞといひたるかへり
ごごにつかはしける

藤原範永朝臣

月みてはたれもこころそなくさまぬをはすて山のふもごならねご

たほやけの御かしこまりにて侍りける比賀茂の社に
よるくまるといりのり申しけるに月のたもころく
侍りければ

賀茂成助

かくはかりくまなきつきをたなくは心のはれて見るよしもかな

鞍馬より出侍りける人の月のいごをかしかりければ
くらまの山もかくこそはなご思ひいてけるをきとて

齋院中務

すみなるゝみやこの月のさやけきになにかくらまの山はこひしき

返し

齋院中將

もろこもに山のはいてし月なれはみやこなからもわすれやはする
月のあかく侍りける、夜小一條のたほいまうち君むか
しをこふるころをよみ侍りけるによめる

清原元輔

あまの原つきはかはらぬ空なからありしむかしの世をやこふらん
月の前に思をのふこいふころをよみ侍りける

藤原實綱朝臣

いつこてもかはらぬあきの月みれはたゞいにしへの空そこひしき
さきの藏人にて侍りける時對月懷舊こいふころを
人々よみ侍りけるに
つねよりもさやけきあきの月を見てあはれこひしき雲のうへかな

源師光

齋信民部卿のむすめにすみわたり侍りけるにかの女
身まかりにければ法住寺こいふ所にこもりゐて侍り
けるに月を見て

民部卿長家

もろこもになかめし人も我もなきやこにはひごりつきやすむらん
兼房朝臣月出てはむかへにこんごたのめてたごもせ
さりければよみ侍りける

江侍従

つき見れば山のはたかくなりけりいてはこいひし人に見せはや
思ふ事ありける比山寺に月を見てよみ侍りける

源為善朝臣

やまのはに入りぬる月のわれならはうき世の中にまたはいてしを
山にすみわつらひて奈良にまかりて住み侍りけるに
知りたる人もなく又みし世のすみかにも似さりけれ

は月のたもしろくはへりけるをなかめてよめる

聖梵法師

むかし見しつきの影にもにたるかなわれこゝもにや山をいてけん
中關白少將に侍りけるとき内の御物忌にこもること
月のいらぬさきにこいそき出て侍りければつこめて

赤染衛門

女にかはりてつかはしける
いりぬこて人のいそきこつきかけはいてゝの後もひさしくそ見こ
例ならずはしまして位なき去らんこたほしめしけ
る此月のあかゝりけるを御らんして

三條院御製

こゝろにもあらてうき世になからへは戀しかるへき夜はの月かな
後朱雀院御時月の明かりける夜上にのほらせ給ひて

いかなる事が申させ給ひけん

陽明門院

いまはたゞ雲井のつきをなかめつゝめぐりあふへき程もしられず
來んこいひてこさりける人のもこに月のあかゝりけ
れはつかはしける

小辨

なほさりの空たのめせてあはれにもまつにかならずいつる月かな
返し

小式部

たのめすはまたてぬる夜そかさねましたれゆるか見る有明のつき
月あかく侍りける夜はしこみに女ごもの立ちて侍り
けるを男まゐらんごいひいれさせて侍りければよ
める

よみ人知らず

たれこてかあれたる宿ごいひなから月よりほかのひきをいるへき
こよひかならずごたのめたる女のもこに月明かりけ

る夜まかりて侍りけるにたろしこめて女あひ侍らさ
りければかへりて又の目つかはしける

藤原隆方朝臣

よしさらはまたれぬ身をはたきながら月見ぬ君か名こそをしけれ
月の山のはに入らんとするを見てよみ侍りける

僧正深覺

なかむれは月かたふきぬあはれわかこの世の程もかはかりそかし
侍従の尾ひろ澤にこもるこきとてつかはしける

藤原範永朝臣

山のはにかくれなはてそ秋のつきこのよをたにもやみにまこはし
月を見てよみ侍りける

中原長國妻

もろごもにたなしうき世にすむ月のうらやましくも西へ行くかな

入道攝政ものかたりなごして寝待の月の出るほごに
ごまりぬへき事なごいひたらはごまらんごいひ侍り
ければよみ侍りける

大納言道綱母

いかにせん山のはにたにごまらてごころの空にいてんつきをは
月のたほろなりける夜入道攝政まうて来てものかた
りし侍りけるにたのもしけなき事なごいひ侍りけれ
はよめる

くもる夜の月さわか身のゆく末ごたほつかなさはいつれまされり
むらかみの御時うへのほりて侍りけるにうへ御ご
のこもりにければかへりたりてよみ侍りける

齋宮女御

かくれぬにたふる菖蒲のうきねして果はつれなくなるごころかな

題しらす

曾彌好忠

かはかみやあらふの池のうきぬなはうき事あれやくるひこもなし
六條前齋院に歌合あらんこしけるに右に心よせあり
こきとて小辨かもこにつかはしける

小式部

あらはれてうらみやせましかくれぬの汀によせしなみのこころを

返し

小辨

きし遠くたよふなみは中そらによるかたもなきなけきをそせし
五月五日六條前齋院にものかたりあはせし侍りける
に小辨れそくいたすこてかたの人々こめてつきの物
語を出し侍りければ宇治の前太政大臣かの小辨か物
語は見こころなこやあらんこてここのものかたりをこ

こめてまち侍りければ岩かきぬまこいふものかたり
をいたすこてよみはへりける

ひきすつる岩かきぬまの菖蒲くさたもひしらすもけふにあふかな
伯耆國に侍りけるはらからのたこし侍らさりければ
たよりにつけてつかはしける

馬内侍

ゆかはこそあはすもあらめはき木のありこ計はたこつれよかし
わつらふ人の道命をよひ侍りけるにまからて又の日
いかくここふらひにつかはしたりける返事に

よみ人しらす

思ひ出てこふここの葉を誰見ましつらきにたへぬいのちなりせは
わつらひて山里に侍りけるころ人のごひて侍りけれ
こ又たこもせずなりにければ

中務典侍

やま里をたつねてごふご思ひしはつらきころを見するなりけり
うまのないしかもごにつかはしける

齋宮女御

夢のこごたほめかれゆく世の中にいつごはんごかたごつれもせぬ
ある人のむすめをかたらひつきて久しくたごし侍ら

さりければ

相模

ふみ見ても物思ふ身ごそなりにけるま野のつき橋ごたえのみして
男のもごよりけはひのかはりたるはいかに今はまか
るまじきかごいひたごせてはへりければ

野かはねごあれゆく駒をいかゞせんもりの下くささかりならねは
しのふる事ある女に中納言兼頼このひてかよふごき
きてをこごたえ侍りにけり中納言さへまたかれく

になり侍りにければ女のよめる よみ人しらす

いたつらに身はなりぬごもつらからぬ人ゆるごたに思はましかは
赤染右大將道綱に名たち侍りける頃つかはしける

大江匡衡朝臣

あるか上に又ぬきかくる唐ころもみさをもいかゞつくりつもりあふへき
定輔朝臣かれくになりてほか心なごありければご
まごきはひきごめよごいふ人侍りければ

源雅通朝臣女

わりなしやころにかなふ涙たに身のうきごきはごまりやはする
熊野へまゐるごて人のもごにいひつかはしける

道命法師

わするなよわするご聞かはみくま野の浦の濱ゆふうらみかさねん

思はんごたのめたりける人のさもあらぬけしきなり
ければよみ侍りける

わすれしこいひつる中は忘れけりわすれんごこそいふへかりけれ
又しくたごつれぬ人のもごに

ものいはて人のこころを見るほごにやかてごはれてやみぬへき哉
後冷泉院うせさせ給ひて世のうき事なご思ひみたれ
てこもりゐて侍りけるに後三條院位につかせ給ひて

後七月七日にまゐるへきよしたほせごご侍りければ
よめる 周防内侍

天のかはたなしなかれごきくなから渡らんごこのなほそかなごき
源頼光朝臣女にたくれて侍りけるころ霜のたきたる
あしたにつかはしける 小大君

このころの夜はの寝覺は思ひやるいかなるをしかしもはらふらん
大貳國章妻なくなりて秋風の夜寒なるよしたよりに
つけていひたごせて侍りける返事につかはしける

清原元輔

たもひきや秋の夜かせのさむけきにいもなき床にひこりねんごは
春ころ爲頼長任なごあひごもに歌よみ侍りけるにけ
ふの事をはわするなごいひわたりてのち爲頼朝臣身
まかりて又の年の春なかたうか許につかはしける

中務卿具平親王

いかなれは花のにほひもかはらぬをすきにし春のこひしかるらん
能宣身まかりて後四十九日のうちにかうふりたまは
りて侍りけるに大江匡衡かもごよりそのよしいひた

こせてはへりける返事にいひつかはしける

祭主輔親

すみそめにあけの衣をかさねきてなみたのいろのふたへなるかな
陸奥にまかりくたりけるにしのふの郡といふ所には
やう見し人をたつねければその人なくなりけりこ
きとて

能因法師

浅茅はらあれたるやこはむかし見し人をしのふのわたりなりけり
母にたくれ侍りて又の年のわさなと過ぎてつれつれ
に侍りける夕暮にちりつもりたる琴なごたこのこひ
て弾くこはなけれご今はほごなごすきにければをり
をりならしけるを叔母なりける人のあひすみけるか
たよりこの音きけはものそかなしきなごいひにた

こせて侍りける返事によめる

大納言道綱朝臣

なきひごはたごつれもせて琴の緒をたちし月日そかへり來にける
母にたくれて侍りけるころ兄弟のかた／＼にはごふ
らひの人々まで來けれごわか方にはたごつるゝ人も
侍らさりければ

源經隆朝臣

しくるれごかひなかりけり埋木はいろつくかたそひごもごひける
もの思ひける此時雨いたくふり侍りけるあしたこよ
ひの時雨はなご人のたごつれて侍りければよめる

少將井尾

ひごしれすたつるなみたの音をせは夜はの時雨にたごらさらまし
故中宮うせ給ひての又の年の七月七日宇治前太政大
臣のもごにつかはしける

後朱雀院御製

こそこのけふ別れし星もあひぬめりなごたくひなきわか身なるらん

後朱雀院うせ給ひて打續き世のはかなき事ごも侍り

ける頃花のたもしろく侍りければ 小左近
はかなさによそへて見れば櫻はなをりしらぬにやならんごすらん

故皇太后宮うせ給ひてあくるごしその宮の櫻の花た
もしろく咲きたりけるに人々いご口をしくなごいひ

ければ 辨乳母

かたみそご思はてはなを見したにも風をいごはぬはるはなかりき
世中はかなくて右大將通房かくれ侍りぬごきとて

小辨

かすならぬ身のうき事は世の中のイになきうちたにいらぬなりけり
たごにもあらて里にまかり出て侍りけるに十月はか

り程近うなりてうちより御ごふらひありける返事に
たてまつりける

齋宮女御

かれはつる浅茅かうへの霜よりもけぬへきほごをいまかごそまつ

後朱雀院うせさせ給ひて上東門院白河にわたり給ひ
て嵐のいたく吹けるつごめてかの院に侍りける侍従

内侍のもごにつかはしける 藤原範永朝臣

いにしへをこふる寢覺やまさるらんきくもならはぬ峰のあらしに

後拾遺和歌集第十六

雜二

入道攝政夜かれかちになり侍りける比くれにはなご
いひたこせて侍りければいひつかはしける

大納言道綱母

かしは木の杜のしたくさくれこごに猶たのめごやもるをみるく
來むごいひてこさりける人の暮にかならすごいひ侍
りける返事に

馬内侍

まつほごのすきのみゆけは大井川たのむるくれもいかゞこそ思ふ
女のもごにくれにはご男のいひつかはしたるかへり

事によみ侍りける

よみ人しらす

浅き瀬をこすいかたしのつなよわみ猶このくれもあやふかりけり

中關白かよひはしめけるころよかれして侍りけるつ

こめてこよひはあかしかたくてこそなごいひて侍り

ければよめる

馬内侍

ひこりぬる人やしるらん秋の夜をなかしごたれかきみにつけつる

忍ひたる男のほかかにいてあへなごいひ侍りければ

新左衛門

春かすみたち出てんごもたもほえす浅みこりなる空のけしきに

為家朝臣ものいひける女にかれくになりて後みあ

れの日くれにはごいひてあふひをたこせて侍りけれ

は娘にかはりてよみ侍りける

小馬命婦

その色の草ごも見えすかれにしをいかにいひてか今日はかくへき

男の夜更けてまうてきて侍りけるにねたりごきとて

かへりにければつこめてかくなんありしご男のいひ

たこせて侍りける返事に

和泉式部

ふしにけりさしも思はる笛たけのたごをそせまし夜ふけたりごも

よひのほごまうてきたりける男のごく歸りにければ

やすらはてたごにたてうき真木の戸をさしも思はぬ人もありけり

小式部内侍のもごに二條前太政大臣はしめてまかり

ぬごきとてつかはしける

堀河右大臣

ひこしれすねたさもねたしむらさきのねすりの衣うはきにをせん

かへし

和泉式部

ぬれきぬごひごにはいはむむらさきのねすりの衣うはきなりごも

平行親藏人にて侍りけるに忍ひて人のもごにかよひ
なからあらかひけるを見あらはして

兵衛内侍

あき霧はたちかくせごも萩はらにしかふしけりご今朝見つるかな
實方朝臣のむすめにふみかよはしけるを藏人行資に
あひぬごきごてこの女のつほねにうかごひて見あら
はしてよみ侍りける
左兵衛督公信

あさなごたきつごみれは白菊のしもにそいたくうつろひにける
大江公資相模守に侍りける時もろごもにかの國に下
りて遠江守にて侍りける頃忘られにければごご女を
ゐて下るごきごてつかはしける
相模

あふさかのせきにこごろはかよはねごみしあつま路は猶そ戀しき

左大将朝光かよひはへりける女にあたなるごご人に
いはるなりごいひ侍りければ女のよめる

よみ人しらす

ねぬなはのねぬ名のいたく立ちぬれは猶たほ澤のいけらしや世に
太政大臣かれごになりて四月はかりにまゆみのも
みちを見てよみ侍りける
藤原兼平朝臣

すむ人のかれ行くやごはごきわかす草木もあきの色にそありける
女のもごにてあかつき鐘をきごて
小一條院

あかつきの鐘のこるごそきごゆなれこれを入あひご思はましかば
男のへたつる事もなくかたらはんなごいひちきりて
いかごたもほえけんひごまにはかくれもごつへくな
ごいひて侍りければ
和泉式部

いつくにかきてもかくれんへたてつる心の隈のあらはこそあらめ
こんごいひてたゝにあかしてける男のもごにつかは
しける

やすらひに真木の戸こそはさゝさらめいかに明ぬる冬の夜ならん
後三條院坊にたはしましける時女房の局の前に柳の
枝をうゑて侍りけるを宵に物語なごしてかへりたる
あした其柳なかりければよへの人のごりたるかごて
ごひにたごせたりければ

藤原顯綱朝臣

青やきのいごになき名そたちけるよるくる人はわれならねごも
皇后宮みこの宮の女御ご聞えける時里へまかり出て
給ひにければそのつごめてさかぬ菊にさして御消息
ありけるに

後三條院御製

またさかぬまかきの菊もある物をいかなるやごにうつろひぬらん
わすれしごいひはへりける人のかれごになりてま
くらはごごりにたごせて侍りけるに

馬内侍

玉くしけ身はよそごになりぬごもふたり契りしごごなわすれそ
ものへまかるごて人のもごにいひたき侍りける

和泉式部

いつ方に行くごはかりはつけてまごふへき人のある身ご思はご
忍ひたる男雨のふる夜まできてぬれたるよごかへり
ていひたごせて侍りければ

かくはかりしのふる雨をひごごはごなにごぬれたる袖ごいふらん
人のもごにふみやる男をうらみやりて侍りける返ご

こにあらかひ侍りければ

そらになる人のごころはさゝかにのいか^{てい}にけふ又かくてくらさむ

男のものいひ侍りける女を今はさらにいかしこいひ

て後雨のいたくふりけるにまかりけりさきとてつか

はこける

みかさ山さしはなれぬさきとしかこ雨もよにこはたもひしものを

年頃住み侍りける女を男思ひはなれてものゝくなこ

はこひ侍りければ女のよめる

よみ人しらす

なけかしなつひにすまじき別かはこれはある世にこ思ふはかり^{そい}を

兼房朝臣女のもこにまうてきて物語し侍りけるをか

くさきとてうたてこいひつかはしたりける返事に物

ここになんこ女のいひたこせて侍りければよめる

中納言定頼

いにしへのきならし衣いまさらその物ここのこけすしもあらし

大貳資通むつまじきさまになんいふさきとてつかは

しける

相模

まこごにや空になき名のふりぬらんあまてる神のくもりなきよに

元輔ふみかよはしける女にもろごもにふみなごつか

はしけるに元輔にあひてわすられにけりさきとて女

のもごにつかはしける

藤原長能

こりぬらんあたる人にわすられてわれならはさむ思ふためしは

入道前太政大臣兵衛佐にて侍りける時一條左大臣の

家にまかりそめてかくなんあるこは知りたりやこい

ひたこせ侍りける返事によめる

馬内侍

りけるをたちかへりこれはあふさかの關に侍りこあ
れはよみ侍りける

清少納言

夜をこめて鳥のそらねははかるこもよにあふ坂のせきはゆるさし
三輪の社わたりに侍りける人を尋ぬる人にかはりて

素意法師

ふるさこのみわの山邊をたつぬれこすきまの月のかけたにもなし
はらからなさいはんさいふ人の忍ひて來んさいひた
るかへり事に

相模

あつまちのそのはらからはきたりこも逢坂まではこさしこそ思ふ
俊綱朝臣たびくふみつかはしけれこ返事もせさり
けるをなほなさいひ侍りければ櫻の花にかきてつか
はしける

兵衛姫君

ちらさしと思ふあまりにさくら花ここのはをさへをしみつるかな
むつましくもなき男に名たちける此その男のこよ
り春もたちぬいまはうちこけねかしなさいひて侍り
ければ

下野

さらてたに岩まの水はもるものをこほりこけなは名こそなかれめ
能通朝臣女を思ひかけて石山にこもりてあはん事を
いのり侍りけりあふよしの夢を見て女のめのこにか
くなん見たるさいひつかはして侍りければかくよみ
てつかはしける

四條宰相

いのりけん事は夢にてかきりてよさてもあふてふ名こそをしけれ
資良朝臣藏人にて侍りける時國韓神のまつりの内侍
にもよほすこてみそきすれここの世の神はしるしな

ければそのからかみにいのらんといひて侍りける返

事によめる 少將内侍

ちかきたにきかぬみそきをなにかそのから神まては遠くいのらん

家綱朝臣ふみかよはし侍りけるにあはぬさきにたえ

たえになりければつかはしける 伊賀少將

忘るゝも若しくもあらずねぬなはのねたくと思ふことしなければ

左衛門藏人にふみつかはしけるにうごくのみ侍りけ

れはちひさきうりにかきてつかはしける

少將藤原義孝

ならされぬ御園のうりとしりなからよひあかつきことたつそ露けき

人のむすめのをさなく侍りけるをたごなひてなごち

きりけるをことさまに思ひなるへしごきとてそのわ

たりの人の扇にかきつけ侍りける 左大將朝光

生ひ立つをまつと頼めしかひもなく浪こすへしごきくはまごごか

秋をまてといひたる女につかはしける

源道濟

いつしかご待ちしかひなく秋かせにそよごはかりも萩のたごせぬ

男のふみかよはしけるにこのはつかのほごにごたの

めけるをまちごほごいひ侍りければ

和泉式部

君はまた知らさりけりな秋の夜の木の間のつきははつかにそみる

中納言定頼馬にのりてまうてきたりけるに門あけよ

ごいひ侍りけるをさかくいひてあけ侍らさりければ

相模

さもこそはこころくらへにまけさらめ早くもみえし駒のあしかな
ものいひかはしける人のたごせすこころみければ

中原長國

たのつからわか忘るゝになりにけり人のこころをこころみしまに
つらかりけるわらはをうらむこてたごし侍らさりけ
れはわらはのもこよりわれさへ人をこいひにたごせ
て侍りければ

律師朝範

うらみすはいかてか人にこはれましようきも嬉しき物にそありける
橋則長父の陸奥守にて侍りける比馬にのりてまかり
すきけるを見侍りて男はさもしらさりければまたの
日つかはしける

相模

網繰えてはなれ果てにしみちのくのをふちの駒をきのふ見しかな

木葉のいたくちりける日人のもごにさしたかせける
言の葉につけてもなごかごはさらんよもきの宿もわかぬあらしを

返し

中納言定頼

八重ふきのひまたにあらは芦のやにたごせぬ風はあらしごを
三條太政大臣家に侍りける女承香殿にまわりて見し
人ごたにさらにたごはすこころみ侍りければ

藤原實方朝臣

わりなごや身はこころへの内なからごへごは人のうらむへしやは
高階成棟小一條院の御供に難波にまゐるごていかに
こひしからんすらんごいひにたごせて侍りければ

中宮内侍

こはここそ思ひもいてめ津の國のなからへゆかはいまわすれなん

人にはかなきたはふれこいふこてうらみける人に

上總大輔

これもさはあしかりけりな津の國のこや事つくるはしめなるらん

小一條院かれくになり給ひける比よめる
土御門御くしけこの

こころえつ藝のたくなはうちはへてくるをくるしと思ふなるへし

日ころ牛をうしなひてもこめわつらひけるほこにた
えたえになりける女の家に此牛入りて侍りければ

女のもこよりひかせてうしこみし心にまさりけりこ

いひたこせて侍りけるかへり事に 祭主輔親

かすならぬ人を野かひのころにはうしこも物をたもはさらなむ
人のつほねを忍ひてたきけるにたそここひ侍りけ

れはよみ侍りける

大貳成章

幾なる人はあまたにきこゆるをたかなのりそをかりてこたへん

又しうたこせぬ人の山吹にさして日ころのつみはゆる
せこいひて侍りければ

和泉式部

こへこしもたもはぬ八重の山吹をゆるすこいはをりに來んこや
たなし人のものよりきたりこきくてたなし花につけ
てつかはしける

あちきなく思ひこそやれつれくこひこりやゐての山ふきのはな
わつらふこいひて又しうたこせぬ男のほかにはあり
くこきくてつかはしける

少將内侍

ねぬなはのくるしき程のたえ間かこたゆるを知らて思ひけるかな
師資朝臣のものいひわたりけるをたえしなこ契りて

後又たえてこし比になりにつければかよはしけるふみ
をかへすこてそのはしにかきつけてつかはしける

式部命婦

ゆくすゑをなかれてなにくたのみけん絶えけるものを中河のみつ

門たそくあくこてかへりにける人もこにつかはし

和泉式部

ける

長こて明けすやはあらん秋の夜はまてかし棋のこはかりをたに

内より出てはかならすつけんなさちきりける人のた

こもせて里に出てにつければつかはしける

藤原道信朝臣

あまの原はるかにわたる月たにもいつるはひこに知られこそすれ

藤原元真

題しらす

うき事もまたしらくもの山のはにかゝるやつらきころなるらん

齋宮女御

ふく風になひくあさは我なれやひこのころのあきをしらする

後拾遺和歌集第十七

雜三

備中守棟利身まかりにけるかはりを人々のそみ侍る
ときとて内なりける人の許につかはしける

清原元輔

たれか又としへぬる身をふりすてときひの中やまこえんごすらん
あなかに侍りけるころつかさめしを思ひやりて

源重之

はるここにわすられにける埋木ははなのみやこをたもひこそやれ
つかさめしにもれてのここの秋うへのをのこごも大

井にまかりて舟にのり侍りけるによめる

大江匡衡朝臣

かは舟にのりてこゝろの行くときはしつめる身ともたもほえぬ哉

大納言公任宰相になり侍らさりける比よみてつかは

しける

大江為基

世のなかをきくにたもこのぬるゝかな涙はよその物にそありける

つかさめし侍りけるに申文にそへて侍りける

藤原國行

いたつらになりぬる人の又も有らはいひ合せてそねをはなかまし

小一條右大將になつきたまふこてよみてそへて侍り

ける

源重之

みちのくのあたちの真弓ひくやこて君にわか身をまかせつるかな

後朱雀院の御とき年頃よあつかうまつりけるに後冷

泉院位につかせたまひて又よるにまありてのち上東

門院にたてまつり侍りける 天台座主明快

雲のうへにひかりかくれし夕よりいく夜こいふにつきを見つらん

藏人にて冠たまはりける日よめる 源經任

かきりあれは天のはころもぬきかへてたりそわつらふ雲のかけ橋

右大辨通俊藏人頭になりて侍りけるをほこへてよろ

こひいひにつかはすこてよめる 周防内侍

うれしてふ事はなへてになりぬれはいはて思ふにほこそへにける

後冷泉院御時藏人にて侍りけるを冠給ひて又の日大

貳三位の局につかはしける 橘為仲朝臣

澤みつにわりあるたつはこしふれとおなしこもなれし雲井そこひしかるりけるへき

同じ御時藏人にて侍りけるに世中かはりて前藏人に
て侍りけるを當時に臨時祭の舞人にまかり入りて試

樂日よめる

橋俊宗

思ひきやころもの色はみこりにてみよまたたけをかさすへしこは

世中をうらみてこもりゐて侍りける比やへさくを見

てよみはへりける

前大納言公任

たしなへて咲く白菊は八重々々のはなのしもこそ見えわたりける

年ころしつみゐてよろつを思ひなけき侍りけるころ

藤原兼綱朝臣

待つ事のあるこや人の思ふらんころにもあらてなからふる身を

はらからなる人のしつみたるよしいひにたこそせて侍

りける返事につかはしける

藤原元真

君をたにうかへてしかななみた川しつむなかにもふちせありやこ

身のいたつらになりはてぬる事を思ひなけきつゝ播

磨にたひく通ひ侍りけるに高砂の松を見て

藤原義定

われのみご思ひしかこもたかさこのをへの松もまた立てりけり

世中をうらみけるころ惠慶法師かもこに遣はしける

平兼盛

世のなかを今はかきりご思ふにはきみこひしくやならんごすらん

賀茂神主成助かもこにまかりて酒なごたうへていま

また冠たまはさりける事をなけきてよみ侍りける

津守國基

もみちするかつらの中にすみよしの松のみひこりみこりなるかな

つかさめしにもりてなけき侍りける比女のもごにつ
かはしける
中納言基長

われふねのしつみぬる身のかなしきは清によするなみさへそなき
ごしころしり侍りける救のうれへある事ありて宇治
前太政大臣に侍りけるころ雪ふりたるあした為仲朝
臣のもごにいひつかはしける
源兼俊母

こつねつる雪のあしたのはなれ駒きみはかりこそあごを知るらめ
小一條院春宮ご聞えける時にもはずに位わたり給ひけ
るに火たきやなご毀ちさわくをみてよみ侍りける
堀河女御

雲井まで立ちのほるへき煙かご見えしたもひのほかにもあるかな
同院高松女御にすみうつり給ひてたえくになり給

ひての比松風心すこく吹けるをきくと
まつかせは色やみごりに吹きつらんもの思ふ人の身にそしみぬる
題しらす
源道濟

世の中をたもひみたれてつくくごなかわるやごに松秋イかせそ吹く
世中心にかなはてうらみ侍りけるころ月をなかめて
よみ侍りける
藤原為任朝臣

こころには月見んごしも思はねごうきにはそらそなかめられける
ごごありて播磨へまかりくたりけるみちより五月五
日に京へつかはしける
中納言隆家

世の中のうきにたひたるあやめ草今日はたもごにねそかくりける
五月五日服なりける人の許につかはしける

小辨

今日とてもあやめしられぬ袂にはひきたかへたるねをやかくらん

静範法師やはたの宮の事にかゝりて伊豆國になかさ

れて又のこし五月にうちの太貳三位のもごにつかは

しける

藤原兼房朝臣

五月やみこゝるのもりのほこゝきす人しれすのみ鳴き^{わい}たるかな

返し

太貳三位

ほこゝきすこゝるのもりに啼くこゑはきくよそ人の袖もぬれけり

これをきこしめしてめしかへすへきよしおほせくた

されけるをきよてよめる

素意法師

すへらきもあら人かみもなこむまてなきける社のほこゝきすかな

丹後國にて保昌朝臣あすかりせんといひける夜鹿の

啼くを聞きてよめる

和泉式部

こごわりやいかてか鹿のなかさらん今夜はかりのいのちと思へは

西宮のたほいまうちきみ院紫にまかりてのちすみ侍

りけるにしのみやの家を見ありきてよみ侍りける

惠慶法師

まつかせも岸うつ浪ももろごもにむかしにあらぬこゑのするかな

二條前大まうちきみ日ころわつらひてたこたりて後

なごごはさりつるそごいひ侍りければよめる

小式部内侍

しぬはかり歎きにこそは歎きしかいきてごふへき身にあらねは

題しらす

齋宮女御

大そらにかせ待つほごのくものいのこゝろほそさを思ひやらなむ

返し

東三條院

思ひやるわかころも手はさゝかにのくもらぬ空にあめのみそ降る

世中さわかしきころ又しうたせぬ人のもごにつか

はしける

伊勢大輔

なきかすに思ひなしてやはさらんまたありあけの月まつものを

世のはかなかりけるころ梅花をみてよめる

小大君

散るをこそあはれと見しか梅の花はなやここしはひをこのはん

京よりくして侍りける女を筑紫にまかり下りて後こ

と女にたもひつきて思ひいてすなりにけり女たより

なくて京にのほるへきすへもなく侍りけるほごにわ

つらふ事ありてしなんごしけるをり男のもごにいひ

つかはしける

よみ人しらす

ごへかしなくよも有らし露の身をこはしも言の葉にやかゝるご

或人云この女經衡筑前守にて侍りける時ごもにまかりく

たれりける人のめになんありけるかくて女なくなりけ

れは經衡のちにきゝつけて心うかりけるものゝふの心か

なごて男追ひのほらせられにけり

世のなかつねなく侍りけるころよめる

和泉式部

ものをのみ思ひしほごにはかなくて淺茅かするによはなりにけり

忍ふへき人も無き身はあるをりにあはれくごいひやたかまこ

たもふ事はへりけるころもみちをてまさくりにして

よみ侍りける

いかなれは同じ色にて落つれごもなみたは目にもごまらさるらん

世中さわかしく侍りけるころ夕くれに中納言定頼か

もごにつかはしける

堀河右大臣

つねよりもはかなきころの夕くれはイになくなる人そかそへられける

返し

中納言定頼

草の葉にわかぬはかりの露の身はいつそのかすにいらんごすらん

世中つねなく侍りける此又しうたごせぬ人のもごに

赤染衛門

消えもあへすはかなき程の露はかりありやなしやご人のごへかこ

世中をなにとたごへんごいふふるごを上にたきて

源順

あまたよみ侍りけるに
世の中をなにとたごへん秋の田をほのかにてらすよひのいなつま

中關白のいみに法興院にこもりてあかつき方に千鳥

の啼き侍りければ

圓昭法師

明けぬなり賀茂の河瀬に千鳥なく今日もはかなくくれんごすらん

文集の肅々暗雨打窓聲ごいふごころをよめる

大貳高遠

こひしくは夢にもひごを見るへきに窓うつあめに目をさましつゝ

王昭君をよめる

赤染衛門

なけきごしみちの露にもまさりけりなれにし里をこふるなみたは

僧都懷壽

たもひきや古きみやこを立ちはなれこの國ひごにならんものごは

懷圓法師

見るたひにかゝみの影のつらき哉かゝらさりせはかゝらまじやは

入道前のたほいまうち君法成寺にて念佛たごなひ侍

りけるころ後夜の時にあはんとて近きところにやこ
りてはへりけるにさりの啼きはへりければむかしを
思ひいてよみ侍りける
井手のあま

いにこへはつらくきこえし鳥の音のうれしきさへそ物はかなしき
修行に出てたつ日よみて右近馬場の柱にかきつけは
へりける
増基法師

ともすれは四方の山邊にあくかれしころに身をもまかせつる哉
かたらひ侍りける人のもこより世をそむきなんこあ
りしはいかゞこいひたこせて侍りければ
馬内侍

しかすかにかなしき物は世の中をうきたつほどのころなりけり
山にのほりて法師になり侍りける人につかはしける

藤原長能

なにかその身のいるにしもたけからん心をふかきやまにすませよ
頼家朝臣世をそむきぬこきとてつかはしける

律師長濟

まことにや同じみちには入りにけるひこりは西へ行かしと思ふに
中宮のないしあまになりぬこきとてつかはしける

加賀左衛門

いかてかく花のたもごをたちかへてうらなる玉をわすれさりけん
返し
中宮内侍

かけてたにころものうらに玉ありと知らて過ぎけん方そくやしき
上東門院あまにならせ給ひけるころよみてきこえは
へりける
選子内親王

君すらもまことのみちに入りぬなりひこりやななき暗にまよはん

高階成順世をそむきはへりけるにあさの衣を人のも

こよりたこせ侍るこて よみ人しらす

今日こしも思ひやはせしあさころもなみたの玉のかゝるへしこは

返し 伊勢大輔

思ふにもいふにもあまるここなれやころもの珠のあらはるゝ日は

後一條院うせさせ給ひて世のはかなくともほえけれ

は法師になりて横川にこもりて侍りける比上東門

院よりこはせたまひたりけれは 前中納言顯基

世を捨てゝ宿をいてにし身なれこも猶こひしきはむかしなりけり

御返し 上東門院

こきのまも戀しき事のなくさまは世はふたゝひもそむかさらまし

世をそむく人々たほく侍りける頃 前大納言公任

思ひしる人もありける世のなかをいつをいつこてすくすなるらん

三條院東宮と申しけるとき法師になりて宮のうちに

たてまつりける 藤原統理

君にひこなれならひそたく山に入りてのちはわひしかりけり

御かへし 三條院御製

わすられす思ひ出てつゝやまひこをしこそ戀しくわれもなかむる

法師になりてすみ侍りけるこころに櫻の咲きて侍り

けるを見て 前中納言義懷

見し人もわすれのみ行くふるさこにこゝろなかくも來たる春かな

世をそむきて長谷に侍りけるころ入道中將の許より

またすみなれしかしなと申したりけれは

前大納言公任

たに風になれすといかと思ふらんころははやくすみにしものを

良暹法師大原にこもりぬきとてつかはしける

素意法師

水草ぬしむほろのしみつ底すみてころにつきのかけはうかふや

返し

良暹法師

ほこへてや月もうかはんむほはらやむほろの清水すむ名はかりに

良暹法師のもこにつかはしける

藤原國房

思ひやるころさへこそさひしけれ大はらやまのあきのゆふくれ

弟なりける法師の山こもりして侍りけるかもとより

かくてなむありとくまじきといひて侍りける返事に

つかはしける

律師朝範

れもはずにいるこは見えきあつさ弓かへらはかへれ人のためかは

長樂寺にすみ侍りけるころ人の何事かといひて侍り

ければつかはしける

上東門院中將

思ひやれこふひこもなきやま里のかけひのみつのころほそさを

五十一
九

後拾遺和歌集第十八

雜四

則光朝臣のもこに陸奥國にくたりて武隈の松をよみ
侍りける

橘季通

たけくまの松はふた木をみやこひこいかゝこはゝみきこ答へむ

みちのくにゝふたゝひ下りて後のたひたけくまの松

も待らさりければよみ侍りける 能因法師

たけくまの松はこのたひ跡もなし千こせをへてやわれはきつらん

河原院にてよみ侍りける

大江嘉言

さこひこのくむたに今はなかるへし岩井のしみつみくさるにけり

五十一

同じ所にて松をよみ侍りける 江侍従

こしへたるまつたになくは浅茅原なにかむかしのしるしならまし
もごすみ侍りける家をものへまかりけるにすぐさて

松の木末のみえ侍りければよめる 左衛門督北方

こしをへて見る人もなきふるさどにかはらぬ松そあるしならまし

六條中務親王家に子日の松をうゑて侍りけるをかの

みこ身まかりて後その松を見てよみはへりける

源為善朝臣

君か植ゑし松はかりこそ残りけれいつれのはるのねの日なりけん

けふ中の子こはしらすやさてこもたちのもごなりけ

る人の松をむすひてたこせて侍りければよめる

馬内侍

たれを今日まつこはいはんかくはかり忘るゝ中のねたけなる世に

縁竹不辨秋といふころを 大藏卿師經

みごりにて色もかはらぬくれ竹はよのなかきをやあきこしるらん

永承四年内裏歌合に松をよめる 前太宰帥資仲

いはしろの尾のへの風にこしふれご松のみごりはかはらさりけり

うへのをのこごも松澗底に生ひたりといふころを

御製

よろつ代の秋をも知らて過ぎたる葉かへぬ谷のいはねまつかな

題しらす 藤原義孝

みやま木をねりそもてゆふしつのはなほこりすまの心こそ見る

宇治にて人々歌よみ侍りけるに山家旅宿といふ心を

民部卿經信

旅ねするやこはみやまにこちられてまさきのかつらくる人もなし

關白前大まうち君の家にてかつまたの池をよみ侍り

藤原範永朝臣

馬もゐていくよへぬらん勝間田のいけにはいるのあこたにもなし

すまの浦をよみ侍りける
藤原經衛

立ちのほるもしほの煙たえせねはそらにもしるきすまのうらかな

龍門の瀧にて
中納言定頼

くる人もなきたくやまの瀧のいこは水のわくにそまかせたりける

やよひの月龍門にまゐりて瀧のもこにてかの國のか

み義忠朝臣かもの花の侍りけるをいかく見るこい

ひ侍りければ
辨乳母

ものいはとこふへきものをもの花いく世かへたる瀧のしらいこ

美作守にて侍るこき瀧のまへに石たて水せきいれて

よみ侍りける

藤原兼房朝臣イナシ

せきいると名こそ流れてこまるこも絶えず見るへきたきの糸かは

大覺寺のたきこのを見てよみ侍りける

赤染衛門

あせにけるいまたにかゝる瀧つ瀬のはやくそ人は見るへかりける

法輪にまゐりてよみ侍りける
源道濟

こしここにせくこはすれと大井川むかしの名こそなほなかれけれ

かつらなる所に入々まかりて歌よみて又來んこいひ

て後にかのかつらにはまからて月の輪こいふ所に入

人まかりあひてかつらをあらためて來るよしよみ侍

りけるにかはらけこりて
祭主輔親

さきの日にかつらの宿を見しゆゑは今日月のわにくべきなりけり

修理大夫惟正信濃守に侍りける時ごもにまかりくた

源重之

いつる湯のわくにかゝれる白糸はくるひご絶えぬ物にそありける

延久五年三月住吉にまゐらせ給ひてかへさによませ

後三條院御製

住吉のかみはあはれごたもふらんむなしきふねをさしてきたれは

民部卿經信

たきつ風吹きにけらしなすみ吉のまつのしつ枝をあらふしらなみ

花山院の御ごもに熊野へまゐり侍りけるみちに住吉

惠慶法師

住吉のうらかせいたく吹きぬらしきしうつなみのごゑしきるなり

右大将濟時住吉にまうて侍りけるごもにてよみはへりける
藤原為長

松みれはたちうきものをすみの江のいかなる浪かしつころなき

住吉にまゐりてよみ侍りける
平棟仲

わすれくさつみてかへらん住吉のきしかたの世はたもひてもなし

藏人にて侍りける時御まつりの使にてなにはにまかりてよみ侍りける
源頼賢

たもふごごかみはしるらん住吉のきしのしらなみたか世なりごも

熊野へまうて侍りけるに住吉にて經供養すごてよみ侍りける
増基法師

ごきかけつころもの玉はすみ吉のかみさひにけるまつのごすゑに

舉周和泉の任はてまかりのほるまゝにいごたもく

わつらひ侍りけるを住吉のたよりなごいふ人侍りけ
れはみてくらたてまつり侍りけるにかきつけゝる

赤染衛門

たのみてはひさしくなりぬ住吉のまつこのたひのしるしみせなん

上東門院住吉にまゐらせ給ひて秋の末より冬になり

てかへらせたまひけるによみ侍りける

上東門院新宰相

みやこいと秋よりふゆになりぬれはひさしき旅の心地こそすれ

天王寺にまゐりてかめ井にてよみ侍りける

辨乳母

よろつ世をすめるかめ井の水やさはごみの小川のなかれなるらん

長柄橋にてよみ侍りける
前大納言公任

橋はしらなからましかはなかれての名をこそ聞かめ跡を見ましや

天王寺にまゐるこてなからの橋を見てよみ侍りける

赤染衛門

われはかりなからの橋はくちにけりなにはの事もふるゝかなしさ

上東門院すみよしにまゐらせたまひて歸るさに人々

歌よみ侍りけるに
伊勢大輔

いにしへにふり行く身こそ哀なれむかしなからのほしを見るにも

錦の浦ごいふごころにて
道命法師

名にたかき錦のうらを來て見れはかつかぬあまはすくなかりけり

熊野にまゐりてあす出てなんごし侍りけるに人々し

はしはさふらひなんや神もゆるしたまはしなごいひ

侍りける程にたごなしの川のほごりにかしら白きか

増基法師

らすのはへりければよめる

やまからすかしらも白くなりけりわかかへるへき時や來ぬらん

住吉にまゐりてかへりにけるに隆經朝臣なにはこい

ふ所に侍りこきくてまかりよりて日比あそひてまか

りのほりけるになこり戀こきよしいひたこせて侍り

ければ道よりつかはしける

わかれ行く舟はつなてにまかすれこころは君かかたにこそひけ

賀茂にまゐりける男の狩衣のたもこのちぬはかり

ほころひて侍りけるを見て亦まゐりける女のいひつ

かはしける

道すからちぬはかりにふる袖のたもこになにを つゝむなるらん

返し

ゆふたすきたもこにかけて祈りこし神のしるしを今日見つるかな

祭のかへさにゑひさまたれたるかたかきたる所を

安法々師

こゝのへし賀茂のやしろのゆふたすき歸るあしたそ亂れたりける

實方朝臣女のもこにまうてきてかうしをならし侍り

けるに女の心しらぬ人してあらましけにこはせて侍

りければかへり侍りにけりつこめて女の遣しける

よみ人しらす

明けぬ夜の心地なからにやみにしをあさくらこひし聲はきくきや

返し

ひさりのみ木の丸このにあらませはなのらて聞にまよはましやは

はつせにまゐり侍りけるにきのこのこいふ所にやこ

らんごし侍りけるに誰ごしりてかなごいひければこ
たへすこて 赤染衛門

名のりせは人しりぬへし名のらすは木のまる殿をいかてすきまこ
貫之か集をかりて返すこてよみ侍りける 惠慶法師

ひごまきに千々のこかねをこめたれは人こそなけれ聲はのこれり
返し 紀時文

いにしへの千々のこかねは限あるをあふはかりなき君かたまつさ
紀時文かもごにつかはしける 清原元輔

かへしけむむかしの人のたまつさをきくとそそく老のなみたを
家集のはしにかきつけくる 祭主輔親

はなのしへ紅葉の下葉かきつめて木のもごよりやちらんごすらん

伊勢大輔か集を人のこひにたこせて侍りけるにつか
はすこて 康資王母

たつねすはかきやる方そいやなからましむかしのなかれみ草つもりて

後三條院御時月明かりける夜侍る人なご庭にたろし
て御らんしけるに人々たほかる中にわきて歌よめこ

たほせこご侍りければよめる 後三條院越前

いにしへの家の風こそうれしけれかゝる言の葉散りくごたもへは

七月はかりにわかき女房月見にあそひありきける夜
藏人公俊新少納言かつほねに入りけりご人々ごい
ひあひつゝ笑ひけるを九月つこもりかたに上きこし
めして御たうかみにかきつけさせ給ひける

後三條院御製

あき風にあふここのはやちりぬらんその夜の月のもりにけるかな

義忠朝臣ものいひける女のめひなる女に又すみうつ

り侍りけるをきくと遣はしける 赤染衛門

まことにやははすて山の月は見るよもさらしなごにもふわたりを

かたらはんこいひて道命法師のもごにまうてきたる

人のよみはへりける よみ人しらす

たえやせんいのちそしらぬみなせ川よしなかれてもこころみよ君

近き所に侍りけるにたごし侍らさりければ村上の女

三宮のもごより思ひへたてけるにやはなこころにこ

そなごいひたこせたる返事に 親子内親王

いはぬまをつゝみし程にくちなしの色にや見えしやまふきのはな

良暹法師ものいひわたる人に逢ひかたきよしを歎き

わたり侍りけるにけふなんかの人に逢ひたるこいひ

にたこせ侍りければ遣はしける 藤原孝善

うれしさを今日はなにかつゝむらんくちはてにきこ見えし袂を

かたらひたる男の女のもごに遣はさむとて歌乞ひ侍

りければまつわか思ふこごをよみ侍りける

和泉式部

かたらへはなくさむ事もあるものをわすれやしなん戀のまされに

五節の命婦のもごに高定忍ひにかよふこきとてたれ

ごもしらてかの命婦のもごにさしたかせはへりける

六條齋院宣旨

忍ひ音を聞きこそわたればとくすかよふ垣根のかくれなければ
そらこごなけき侍りける比かたらふ人のたえてたご

し侍らぬにつかはしける

馬内侍

うかりけるみのうの浦のうつせ貝むなしき名のみたつはきときや

御あかもとの鍋をもちて侍りけるを大盤所より人の

乞ひ侍りければ遣はすこて鍋にかきつけはへりける

藤原顯綱朝臣

たほつかなつくまの神の爲ならはいくつかなへのかずはいるべき

後拾遺和歌集第十九

雜五

後冷泉院みこの宮と申しける時二條院始めてまゐり
たまひけるを見奉ることやありけんよみ侍りける

出羽辨

はるここの子日はたほくすきつれとかくるふた葉の松は見さりつき

二條院東宮にまゐり給ひて藤壺にたはしましけるに

前中宮のこのふちつほにたはせしことなと思ひいつ

る人の侍りければ

大貳三位

忍ひねのなみたなかけそかくはかりせはしと思ふころのたもこに

返し

出羽辨

春の日にかへらさりせはいにしへのたもごなからや朽果てなまし
後冷泉院みこの宮ご申しける時うへのをのことも一
品の宮の女房ごもろごもに花をもてあそひけるに故
中宮の出羽も待るごきくつつかはしける

源為善朝臣

はなさかり春のみやまのあけほのに思ひわするなあきのゆふくれ

三條院春宮ご申しける時式部卿敦義親王生れて侍り
けるに御はかしたてまつるごて結ひつけて侍りける

入道前太政大臣

よろつ世を君かまもりごいのりつとたち造りえのしるごを見よ

御返し

三條院御掬

いにしへの近きまもりをこふるまにこれは忍ふるしるしなりけり

或人云この歌は故左大将濟時みこたちのたほちにて侍り
ければけふの事をかの大將や取りあつかはましなごたほ
し出てよませたまひけるなり

一條攝政かくれ侍りて後少將義孝子生せて侍りける
七夜に昔を思出てよみ侍りける 法住寺太政大臣

あふにつけ思ひそいつるむかしのはのさけかれごも君そいはまご
六條左大臣身まかりて後播磨國に下り侍りけるにた
かさこのほごにてごは高砂ごなんいふごある人い
ひ侍りければむかしの思ひいつる事やありけんよみ
侍りける

源相方朝臣

高砂ごたかかないひそむかし聞きし尾のへのしらへまつそ戀ごき

後一條院をさなくたはしましける時まつり御覽しけるにいつきのわたり侍りけるをり入道前太政大臣いたきたてまつり侍りけるを見たてまつりてのちに太

政大臣のもごにつかはしける 選子内親王

ひかりいつるあふひの影を見てしかは年へにけるも嬉しかりけり

返し 入道前太政大臣

もろかつらふた葉なからも君にかくあふひや神のしるしなるらん

後一條院御時賀茂行幸侍りけるに上東門院御こしに

のらせ給ひて紫野よりかへらせ給ひける又のあした

きこえさせ給ひける 選子内親王

みゆきせし賀茂の川なみ歸るさに立ちやよるごてまぢあかしつる

後冷泉院御時上東門院に御幸あらんごしけるをこゝ

まりて後うちより硯の箱のふたに櫻の枝をいれてたてまつらせ給ひたりける御返しにたほせごごにてよ

み侍りける 上東門院中將

みゆきごか世にはふらせて今はたゞ木末のさくらちらすなりけり

小辨齋院にまゐり侍りてほのかに見たてまつるよし

いひたこせて侍りける返ごごに 六條齋院宣旨

ゆふしてやしけき木の間をもる月のたほろけならて見えし影かは

宇治前太政大臣少將に侍りける時春日の使にいでた

ち侍るに又の日雪のふり侍りけるに大納言公任かも

ごにつかはしける 入道前太政大臣

わかたつむ春日のはらに雪降ればこゝろつかひを今日さへそやる

返し 前大納言公任

身をつみてたほつかなきはゆきやまぬ春日の野邊の若菜なりけり

二條前太政大臣少將に侍りける時かすかの使にまかりて又の日霧のいみじうたち侍りければ入道前太政

大臣のもごにつかはしける

みがさやま春日のはらのあき霧にかへりたつらん今朝をこそ待て

上東門院長家民部卿の三條家にわたらせたまひたりけるころにはかに御幸ありてちかき人々のいへめされければまかるへき所なきよしそうせさせ侍りけるその御かへりここに歌をよみてまゐらせよごたほせられければ雪ふる日よみてまゐらせける

伊勢大輔

ごしつもるかしろの雪は大そらのひかりにあたる今日そうれしき

家をかへしにすごたほせられてゆるされにけり

冷泉院東宮ご申しける時女の石井に水汲みたるかた繪にかきたるをよめごたほせご侍りければ

源重之

ごしをへてすめる清水に影見れはみつはくむまで老いそしにける春かしろ白き人のゐたる所繪にかけるを

花山院御製

春くれと消えせぬものは年をへてかしろにつもる雪にそありける三條院御時大嘗會の御禊なごすきてのころ雪のふり侍りけるに大原に住みける少將井のあまのもごにつかはしける

伊勢大輔

世にごよむごよのみそきをよそにして小鹽の山のみゆきをや見し

返し

少將井尾

小盞山木すゑも見えず降りつみしそやすへらきのみゆきなるらん
 一條院うせさせ給ひて上東門院里にまかり出てたま
 ひにける又のこし五節の頃むかしを思ひ出てうへ
 のをのことも引きつれてまゐりて侍りける中によみ
 ていたしける

伊勢大輔

はやく見し山井の水のうすこほりうちこけさまはかはらさりけり
 中納言實成宰相にて五節たてまつりけるに妹の弘徽
 殿女御の御もこに侍りける人かこつきに出てたりけ
 るを中宮の御かたの人々ほのかにきゝて見ならしけ
 むもこしきをかこつきにてみるらんほこも哀と思ふ
 らんこいひて箱のふたにしろかねの扇に蓬菜の山つ

くりなごしてさしくしに日かけのかつらを結ひつけ
 てたきものをたてふみにこめてかの女御の御方に侍
 りける人のもごよりごたほしくて左京の君のもごに
 こいはせて果の日さしたかせける よみ人しらす

たほかりしごよの宮人さし分けてしるき日かけをあはれこそ見し
 かくて臨時祭になりて二條前太政大臣中將に侍りて
 祭のつかひし侍りけるにありしはこのふたに沈の櫛
 白かねの筭かねのはこに鏡なご入れてつかひは中宮
 のはらからなれはにや日かけごたほしくてかごみの
 うへにあしてにてかきて侍りける 藤原長能
 ひかけ草かゝやく影やまかひけんますみのかごみくもらぬものを
 たなし人の五節のわらはのかさみかこつきのからき

ぬにあをすりをしてあかひもなごつけたりけり人々
見侍りけるにあをきかみのはしにかきてむすひつけ
させ侍りける
選子内親王

神代よりすれるころもごいひなから又かさねてもめつらしきかな
一條院御時皇后宮五節たてまつらせたまひけるにか
ひつくろひつかうまつりける人のつけて侍りけるあ
かひものさけていかにせんごいひけるをきくむす
ひつくごてよみ侍りける
藤原實方朝臣

あし引の山井のみつはこほれるをいかなるひもの解くるなるらん
ものいひ侍りける女の五節に出てごご人にきき侍
りければつかはしける
源頼家朝臣

まごごにやあまたかさねしをみ衣ごよのあかりのかくれなきよに

人のこをつげんごちきりて侍りけれごごもりぬご
きくごご人につけはへりければよめる

法眼源賢

思ひきやわかしめゆひしなてしこを人のまかきのはなご見んごは
父の信濃なる女をすみ侍りけるもごにつかはしける

平正家

信濃なるそのはらにこそあらねごもわかはきくご今はたのまん
一條院御時大貳佐理筑紫に侍りけるに御手本かきに
下しつかはしたりければ思ふ心をかきてたてまつら
んごてかきつくへき歌ごてよませ侍りけるによめる

源重之

みやこへごいきの松原いきかへりきみか千ごせにあはんごすらん

父のもごにをさなくて筑前國に侍りて年へてのち成
順かそのくにとなりて侍りければ下りてよめる

中將尾

そのかみのはのこらし箱さきのまつはかりこそわれを知るらめ
阿波守になりて又たなし國にかへりなりて下りける
にこつかみのうらこいふ所に浪のたつを見てよみ侍
りける

藤原基房朝臣

こつかみの浦にこしへてよる浪もたなしところにかへるなりけり
頼國朝臣紀伊守にて侍りける時いふへき事ありてま
かりてけるをこささらにもいさはさりければよみ侍
りける

連敏法師

たいの波よせしこ人はいこふも待つらんものをわかのうらには

肥後守義清くたり侍りてのこしの秋さか野の花は見
きやこいひにたこせてはへりける返事に遣はしける

源兼長

うちむれし駒もたこせぬ秋の野はくさかれ行けと見るひこもなし
あつまに侍りけるはらからのもごにたよりにつけて
つかはしける

源兼俊母

にほひきやみやこの花はあつまちの東風のかへしの風につけしは
返し

康資王母

吹きかへすこちのかへしは身にしみき都のはなのしるへと思ふに
筑紫より上らんとて博多に侍りけるに館の菊のたも
しろく侍りけるを見て

大貳高遠

ごりわきてわか身に露やたきつらん花よりさきにまつそうつろふ

陸奥國に侍りけるに中將宣方朝臣のもことつかはし

ける

藤原實方朝臣

やすらはて思ひたちにしあつま路にありけるものかはかりの關

かたらひ侍りける人のもことみちのくにより弓をつ

かはすこてよみ侍りける

みちのくのあたちの真弓きみにこそ思ひためたるここはかたらめ

實方朝臣みちのくに侍りける時いひつかはしける

大江匡衡朝臣

みやこにはたれをか君は思ひいつるみやこの人はきみをこふめり

返し

藤原實方朝臣

わすられぬ人の中にはわすれぬを待つらんひこのなかにまつやは

津の國にかよふ人の今なん下るこいひて後にも又京

にありけるをきとて人にかはりてよめる

赤染衛門

ありてやはたせさるへき津の國のいまそいく田の社こいひしは

六波羅こいふ寺に講にまゐり侍りけるにきのふのま

つりのかへさに見ける車のかたはらにたちて侍りけ

れはいひつかはしける

相模

きのふまでかみに心をかけしか今日こそそのりにあふひなりけれ

石山にまゐりけるみちに山しなこいふ所にてやすみ

侍りけるに家あるしの心あるさまに見え侍りければ

今かへるさになこいひ侍りけるをよにさしもこいひ

侍りければ

和泉式部

かへるさを待ちこゝろみよかくなからよもたゝにては山しなの里

山階寺供養の後宇治前太政大臣のもとに遣はしける

堀河右大臣

ふかきうみのちかひはしらすみがさ山こころたかくも見えし君哉

山里にまかりてかへる路に家經か西八條の家近しこ

きくて車を引入れて見ありきけるに難波わたりの心

ちせられていごをかしょう侍りければ硯の箱の上にか

伊勢大輔

きつけ侍りける

こもまくらかりの旅寝にあかさはや入江のあしのひこよはかりを

源頼實

山里にまかりて日くれにければ

日もくれぬ人もかへりぬ山さはみねのあらしのたごはかりして

伏見といふ所に四條宮の女房あまたあそひて日暮れ

橋俊綱朝臣

ぬさきにかへらんとしければ

みやこ人くるれば歸るいまよりはふしみのさこの名をもたのまし

かたらふ人のもとにこころありてまかりたりける

にたほめくさまにやありけんよみ侍りける

よみ人しらす

杉もすきやこもむかしの宿なからかはるはひこのこころなりけり

ひえの山に二月五番こて花なごつくる事侍りけりそ

の花つくらせむこて人の山によひのほせて侍りけれ

は昔此山にてもものなごまなひけるこご思ひ出て

蓮仲法師

たもひきやふるさこ人に身をなして花のたよりにやまを見んこは

ある所に庚申しけるに御簾のうちの琴のあかぬ心を

大中臣能宣朝臣

絶えにけるはつかなるねをくり返しかつらのをこそきかまほしけれ

入道一品宮に入々まゐりてあそひ侍りけるに式部卿

敦貞のみこ笛なごをかしくふき侍りければかのみこ

のもごにはへりける人のもごに又の目よへの笛のを

かしかりしよしいひにつかはしたりけるをみこつた

へきくて思ふことのかよふにや人しもこそあれき

ごかめけることなご侍りける返ごごに

相模

いつか又こちくなるへきうくひすのさへつりそめしよはの笛たけ

人のあふきに山里の人すまぬわたりかきたるを見

てよめる

大中臣能宣朝臣

牡鹿ふすしけみにはへる葛の葉のうらさひしけに見ゆるやまさご

法師の色このめるを見てよめる 源重之

つねならぬやまの櫻にこころいりて池のはちすをいひなはなちそ

人のかめにさけ入れてさかつきにそへて歌よみて出

し侍りけるに

藤原為頼朝臣

もちなから千世もめくらんさかつきのきよき光はさしもかけなん

小倉の家にすみ侍りけるころ雨の降りける日叢かる

人の侍りければ山吹の枝を折りてごらせて侍りけり

心もえてまかりすきて又の日山吹の心も得さりしよ

しいひにたこせて侍りける返事にいひつかはしける

中務卿兼明親王

なごへ八重花はさけごも山ふきのみのひごつたになきそかなしき

陸奥守則光藏人にて侍りける時いもせなごいひつけ

てかたらひ侍りけるに里へ出てたらん程に入々尋ね
んにありかな告げそこいひて里にまかり出て侍りけ
るを入々せめてせうこなれは知るらんこあるはいか
かすへきこいひたこせて侍りける返事にめを包みて
つかはしたりければ則光心も得ていかにせよこある
そこまうてきて問ひ侍りければよめる

清少納言

かつきする蚕の在所をそこなりこゆめいふなこやめをくはせけん
駿河守國房に車に乗りてもものにまかりけるみちに父
の定季か墓ありこて俄に車よりたりはへりければよ
める

源頼俊

たらちねははかなくてこそやみにしかこはいつここて立止るらん

山にすみうかれて越の國にまかり下りけるに思ひか
けす良暹法師なごあそひて昔の事をたもひ出てこい
ひ侍りければよめる

慶範法師

思へともいかにならひし道なれは知らぬさかひにまごふなるらん
筑紫よりのほりて道雅三位のわらはにて松君こいは
れはへりけるを膝にするて久しう見さりつるなこい
ひてよみ侍りける

帥前内大臣

浅茅生にあれにけれともふるさこの松は木たかくなりけるかな
前伊勢守義孝宇治前太政大臣のうまやにくたりたり
こきくつつかはしける

天臺座主教圓

いにしへのまゆこしめにもあらねごも君はみま草こりてかふごか
つかひこさりけるさきにゆるされたりければ返事

藤原義孝

はなれてもかひこそなけれ青馬のこりつなかれしわか身と思へは

後拾遺和歌集第二十

雜六 神祇

長元四年六月十七日^{四イ}伊勢のいつき内宮にまゐりて侍
りけるに俄に雨ふり風吹きていつきみつから託宣し
て祭主輔親をめしてたほやけの御事なご仰せられけ
るついでにたひく御みきめしてかはらけたまはす
とてよませたまひける

さかつきにさやけき影の見えぬれは塵のたこり^{そイ}はあらしごをしれ
御和奉りける

祭主輔親

たほち父うまこすけちか三代までに戴きまつるすへらたほんかみ

男にわすられて侍りけるころ貴布禰にまゐりてみた
らし河に螢のこひ侍りけるを見てよめる

和泉式部

物思へはさはのほたるもわか身よりあくかれいつる玉かこそ見る

御返し

たくやまにたきりてたつる瀧津瀬の玉ちるはかりものなたもいそ

この歌はきふねの明神の御返しなり男の聲にて和泉式部

か耳に聞えけるこなんいひつたへたる

世中さわかしく侍りける時里のこね宣旨にてまつり

つかうまつるへきを歌二つなんいるへきこいひけれ

はよみ侍りける

藤原長能

白妙のこよみてくらを取りもちていはひそそむるむらさきの野に

今よりはあらふるこころましますな花のみやこにやしろさためつ

この歌或人云世中さわかしく侍りければ舟岡の北に今宮

こいふ神をいはひてたほやけも神馬たてまつりたまふこ

なんいひつたへたる

稻荷によみてたてまつり侍りける 惠慶法師

いなりやまみつの玉垣うちたきわかねきこをかみもこたへよ

すみよしの宮うつりの日かきつけ侍りける

山口重如

すみよしの松さへかはるものならは何かむかしのしるしならまし

一條院御時はしめて松尾の行幸侍りけるにうたふへ

き歌つかうまつりけるに

源兼澄

ちはやふる松のをやまのかけ見れは今日そ千年のはしめなりける

後三條院御時はしめて日吉社に行幸侍りけるにあつ
まあそひにうたふへき歌たほせここにてよみはへり
ける
大貳實政

あきらけき日吉の御神きみかためやまのかひあるよろつ代やへん
同じ御時祇園に行幸侍りけるにあつまあそひにうた
ふへき歌めし侍りければよめる
藤原經衡

ちはやふる神のそのなるひめ小松よろつ代ふへきはしめなりけり
大原野祭の上卿にてまゐりて侍りけるに雪の所々消
えけるを見てよみ侍りける
治部卿伊房

さかき葉にふるしら雪は消えぬめりかみのころも今やこくらん
式部大輔資業伊豫守に侍りける時かの國の三島明神
にあつまあそひしてたてまつりけるをよめる

能因法師

うご濱にあまのはころもむかえ來てふりけむ袖や今日のはふり子
大貳成章肥後守にて侍りける時阿蘇社に御裝束たて
まつり侍りけるにかの國の女のよみ侍りける
よみ入しらす

あめの下はくゝむかみのみそなれはゆたけにそたつみつの廣まへ
やはたにまうてゝよみはへりける
増基法師

こゝにしもわきて出てけん石清水かみのころをくみてもしらはや
すみよしにまゐりてよみ侍りける
蓮仲法師

住吉のまつのしつ枝にかみさひてみこりに見ゆるあけのたまかき
石清水にまゐりて侍りける女の杉の木のもこにすみ
よしの社をいはひて侍りければやしろのはしらにか

きつけて侍りける

よみ人しらす

さもこそはやこはかはらめすみよしの松さへ楳になりけるかな
貴布禰にまゐりていかきにかきつけ侍りける

藤原時房

たもふこなる河かみにあこたれてきふねは人をわたすなりけり

後冷泉院御時きさいの宮の歌合に春日の祭をよみ侍

りける

藤原範永朝臣

今日まつるみかさの山の神ませはあめのしたにはきみそさかえん

釋教

山階寺の涅槃講にまうてよみ侍りける

光源法師

いにしへの別のにはにあへりとも今日のなみたそなみたならまし

前律師慶暹

つねよりも今日のかすみそあはれなるたきつきにし煙と思へは

二月十五日の夜中はかりに伊勢大輔かもこにつかは
しける

慶範法師

いかなれは今宵のつきのさ夜中にてらしもはてし入りしなるらん
返し

伊勢大輔

世をてらす月かくれにし小夜中はあはれやみにやみなまごひけん
二月十五日夜月のあかく侍りけるに大江佐國かもこ
につかはしける

よみ人しらす

山のは入りし夜はの月なれこなこりはまたにさやけかりけり
天皇太后宮東三條にわたりたまひたりけるころその
御臺堂イに宇治前太政大臣のあふきの侍りけるにかきつ

け侍りける

伊勢大輔

なかりせは

つもるらんちりをもいかてはらはまし法にあふきの風のうれしさ

懺法たこなひ侍りけるに佛にたてまつらんごて周防

内侍のもこに菊をこひ侍りけるにたこせてはへりけ

る返事に

辨乳母

八重菊にはちすの露をたきそへてこくのしなまてうつろはしつる

太皇太后宮五部大乘經供養せさせ給ひけるに法華經

にあたりたる日よみ侍りける

康資王母

さきかたき御法のはなにく露ややかてころものたまごなるらん

故土御門右大臣家の女房車みつにあひのりて菩提講

にまゐりて侍りけるに雨のふりければふたつの車は

かへり侍りにけりいまひこつの車にのりたる人講に

あひて後かへりにける人のもこにつかはしける

よみ人しらす

もろこにもみつの車にのりしかごわれはいちみのあめにぬれにき

月輪觀をよめる

僧都覺起

つきのわにこころをかけし夕よりよろつのことこをゆめごみるかな

維摩經の十喻のなかにこの身芭蕉のこごしこいふこ

ころをよめる

前大納言公任

風吹けはまつやふれぬる草の葉によそふるからにそてそつゆけき

同喻の中にこの身水月のこごしこいふ心をよめる

小辨

つねならぬわか身は水の月なれば世にすみごけんこごもたほえす

三界唯一心

伊勢大輔

ちる花もをしまはこまれ世の中はこころのほかのものこやはさく

化城喻品

赤染衛門

こしらへてかりの宿りにやすめすはまことの道をいかてしらまし

康資王母

道こほみなかそらにてやかへらまし思へはかりのやこそうれしき

五百弟子品

赤染衛門

ころもなる玉こもかけて知らさりきゑひさめてこそ嬉しかりけれ

壽量品

康資王母

わしの山へたつるくもやふかゝらんつねにすむなる月を見ぬかな

普門品

前大納言公任

世をすくふうちには誰かいらさらんあまねきかこは入しさゝねは

書寫のひしり結縁經供養し侍りけるに入々あまた布

施たくりける中にたもふこころやありけんしはしこ
らさりけれはよめる
遊女宮木

津の國の難波のここのりならぬあそひたはふれまでこそ聞け

誹諧歌

題しらす

讀人しらす

笛のねのはるたもしろくきこゆるは花ちりたりこふけはなりけり

橋季通陸奥國に下りてたけくまの松をうたによみ侍

りけるにふた木の松を人こはくみきここたへんなこ

よみて侍りけるをつてにきくてよみ侍りける

僧正深覺

武隈の松はふた木をみきこいふはよくよめるにはあらぬなるへし

題しらす

源道濟

さかさらはさくらを人のをらましやさくらの仇はさくらなりけり

藤原實方朝臣

またちらぬ花もやあると尋ねみんあなかまはしかせに知らすな
こなりより三月三日に人の桃の花をこひたるに

大江嘉言

もくのはな宿にたてればあるしさへすけるものこや人の見るらん
三條太政大臣のもとに侍りける人のむすめを忍ひて
かたらひ侍りけり女の親腹立ちて娘をいさあさまし
くつみけるなこいひ侍りけるに三月三日かの北の方
の三日の夜のもちひ食へていたしけるによめる

藤原實方朝臣

みかの夜のもちひはくはしわつらはし聞けは淀野にはこつむ也

水無月はらへをよみ侍りける

和泉式部

思ふ事みなつきねとてあさの葉をきりにきりてもはらへつるかな
蒜くひて侍りける人今は香もうせぬらんど思ひて人
のもとにまかりたりけるに名残の侍りけるにや七月
七日につかはしける

皇太后宮陸奥

君かかす夜のころもをたなはたはかへしやしつるひるくさしとて

小一條入道前太政大臣のかつらなる所にて歌よませ

たまひけるに紅葉をよみ侍りける 堀川右大臣

もみちはと錦に見ゆさきとしかこ目もあやにこそ今日はなりぬれ
もみちのちり果てたるに風いたくふき侍りければ

増基法師

落ちつもの庭にたにとて見るものをうたてあらこのはきに掃く哉

人のすみたてまつらんいかゞいひたりければよめる
よみ人しらす

こゝろさし大原やまのすみならはたもひをそへてたこすはかりそ
題しらす
天臺座主源心

雲井にていかてあふきと思ひしにてかくはかりになりけるかな
法師の扇をたこして侍りけるをかへすこて

和泉式部

はかなくもわすられにけるあふき哉たちたりけり人もこそ見れ
題しらす

さなくともねられぬ物をいこゝしくつきたころかす鐘のたこかな
七月はかり月のあかゞりける夜女のもこにつかはし
ける
少將藤原義孝

わすれてもあるへきものをこのころの月夜よいたく人なすかせそ

三條院御時うへのごのゐすこてちかく侍りける人々
まくらをたこしてまかり出てければかきつけて殿上
につかはしける
小大君

道しはやたころのかみにならされてうつれる香こそ草まくらなれ
人の草あはせしけるに朝かほかゞみ草なごあはせけ
るにかゞみ草かちければ
よみ人しらす

まけかたのはつかしけなる朝かほをかゞみ草にも見せてけるかな
入道攝政かれくにてさすかにかよひ侍りけるころ
帳の柱に小弓の矢を結ひついたりけるをほかにてこ
りにたこせて侍りければつかはすこてよめる

大納言道綱母



思ひいつることもあらしと見えつれとやといふにこそ驚かれぬれ
人の長門へ今なん下るといひ侍りければよめる

能因法師

しら涙のたちなからたになかとなるよよらの里のよよられよかし

めのごせんごてまうてきたりける女の乳の細く侍り

ければよみ侍りける 大江匡衡朝臣

はかなくも思ひけるかなちもなくてはかせの家のめのごせんごは

返し 赤染衛門

さもあらはあれ大和心しかしこくは細ちにつけてあらずはかりそ

明治四十二年十一月十七日印刷
明治四十二年十一月二十日發行

編者 中川恭次郎

發行者 田中増藏
東京市本郷區龍岡町三十四番地

印刷者 今井甚太郎
東京市本郷區駒込千駄木林町百七十二番地

印刷所 歌學書院印刷部
東京市本郷區駒込千駄木林町百七十二番地

發行所 歌書刊行會

發兌元 歌學書院
東京市本郷區千駄木林町一七二
(電話下谷二七四五ノ甲)

